

第11回 助成研究発表会

『北海道の歴史・文化と観光』

報 告 書

平成28年3月

(一財)北海道開発協会 開発調査総合研究所

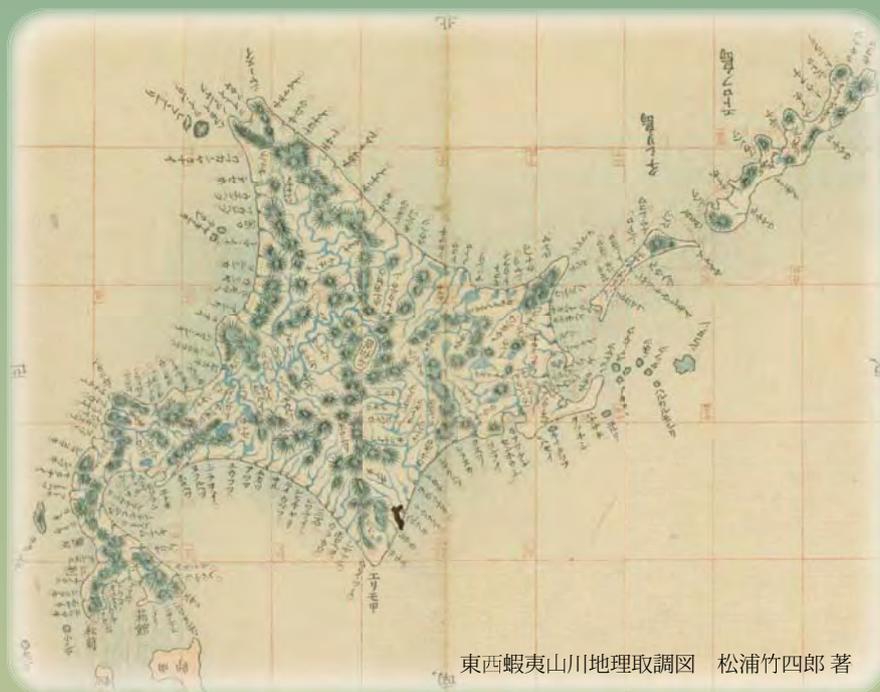
目 次

■第11回助成研究発表会パンフレット	1
■発表会次第	2
■発表者プロフィール	3
■発表会の開催状況	5
■主催者からのご挨拶	6
■研究発表	
・『北海道における先住民文化遺産観光の展開可能性に関する比較研究』 北海道大学創成研究機構特任助教 岡田 真弓 北海道大学大学院文学研究科博士後期課程 高崎 優子	8
・『アイヌ伝承と地名から見た北海道における災害危険箇所』 一般社団法人全国治水砂防協会常務理事 南 哲行	16
・『観光による農村と都市との創造的関係の構築に関する研究』 ～ワインツーリズムの事例分析を通して～ 北海道大学観光学高等研究センター教授 敷田 麻実 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士後期課程 八反田元子	22
■全体的な意見交換	31
■パンフレット掲載の研究概要および説明資料	39

第11回 助成研究発表会

テーマ

『北海道の歴史・文化と観光』



日時 平成27年12月4日(金) 14:00～16:30

場所 (一財)北海道開発協会 6階ホール

主催：(一財)北海道開発協会 開発調査総合研究所

発表会次第

1. 開 会

2. 主催者挨拶

3. 研究発表（発表後意見交換）

■ 『北海道における先住民文化遺産観光の展開可能性に関する比較研究』

北海道大学創成研究機構 特任助教 岡田真弓
北海道大学大学院文学研究科 博士後期課程 高崎優子

■ 『アイヌ伝承と地名から見た北海道における災害危険箇所』

一般社団法人全国治水砂防協会 常務理事 南 哲行

■ 『観光による農村と都市との創造的関係の構築に関する研究』

～ワインツーリズムの事例分析を通して～

北海道大学観光学高等研究センター 教授 敷田 麻実
北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士後期課程 八反田元子

4. 全体的な意見交換

5. 閉 会

発表者プロフィール

●岡田 真弓

研究テーマはパブリック考古学、文化遺産論。北海道アイヌ・先住民研究センター博士研究員を経て、2015年より現職。文化遺産の中でも、特に考古学に関するモノやコトが、現代社会でどのように活用されているのかに着目し、フィールドワークを通じた研究を行っている。2012年より北海道大学アイヌ・先住民研究センターの先住民文化遺産ツーリズムワーキンググループに参加している。最近の論文に、「遺跡・遺産から学ぶ先住民族の歴史と文化」『平成24年度遺跡等マネジメント研究集会（第二回）報告書：パブリックな存在としての遺跡・遺産』pp. 98-107（2013）、「2013年礼文町浜中2遺跡の発掘調査を利用した学校向け考古学教育プログラム」*Anthropological Science* Vol.122, pp. 94-97（2014）等。

●高崎 優子

専門分野は、環境社会学、資源管理論。自然資源・文化資源と地域社会の関係について各地でフィールドワークを通じた研究を行う。2010年より北海道大学アイヌ・先住民研究センターの先住民文化遺産ツーリズムワーキンググループの研究メンバーをつとめ、ガイドブック編纂なども行う（『アイヌヘリテージトレイル ガイドブック』計4編）。主な論文に「自然資源管理のゆらぎを許容する地域社会」『環境社会学研究』（19）, pp.143-157（2013）、「ユイムンという嗜好品：沖縄における寄り物思想とマイナーサブシステム」『嗜好品文化研究会研究奨励事業報告論文集』pp.1-23（2014）等。

●南 哲行

高知県高知市出身。昭和52年京都大学農学部卒。同年建設省入省、北海道庁土木部、建設省土木研究所砂防研究室長、奈良県土木部長、国交省東北地整道路部長、同河川部長、などを経て、平成22年国土交通省砂防部長、平成25年北海道大学大学院農学研究院特任教授、平成27年から全国治水砂防協会常務理事。京都大学博士（農学）。この間、インドネシア、台湾、タイ、イラン、ベネズエラなど多くの海外協力プロジェクトに参加。主要な研究テーマは「砂防及び国土保全学」。講演・論文多数。主な著書に「雪崩とその対策」、「砂防・地すべり・がけ崩れ・雪崩防止工事ポケットブック」「防災情報通信システム」、「現代砂防学概論」がある。

●敷田 麻実

高知大学農学部で漁業を学び、石川県水産課に15年間勤務。その間1990年オーストラリアのジェームズクック大学大学院に留学、帰国後金沢大学大学院環境科学研究科博士課程で博士号取得。1998年に県職員を退職し、金沢工業大学助教授、教授。2007年に北海道大学観光学高等研究センター教授に就任、現在に至る。2005～11年に野生生物保護学会（現名称：野生生物と社会学会）会長。知床では、適正利用・エコツーリズム検討会議座長。専門は、地域マネジメント、地域人材育成、地域資源戦略（エコツーリズム等）、また編著書に「地域資源を守っていかすエコツーリズム」（2011年講談社）ほか。

●八反田元子

「北海道大学農学部で応用微生物学を学び、同大農芸化学専攻修士課程を修了。札幌市に38年間勤務し、1987（昭和62）年、「欧米食品化学事情調査団（厚生省生活衛生局指導）」に参加し、フランスのモエ・ヘネシー社を視察。以降、環境局、区役所等で地域との協同による事業を経験。2009（平成21）年に札幌市を退職。同年、財団法人札幌市中小企業共済センター理事長に就任し、2015（平成27）年、任期満了にて退任。2010（平成22）年から、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻にて社会人学生として学び、後期博士課程に在籍中。研究の視点は、農村と都市の創造的関係の構築に対する観光の機能。兵庫県加古川市生まれ。北海道大学文学部人文科学科卒業後、同大学大学院文学研究科修士課程修了を経て、現在同研究科博士後期課程在籍。主に道内の豪雪過疎地域における高齢者の除排雪活動についての文化人類学的参与観察、札幌発着型広域的除排雪ボランティアにおける支援者と被支援者との相互作用についての社会心理学的実践的研究を展開している。日本雪氷学会北海道支部2011年度北海道雪氷賞（北の風花賞）「豪雪過疎地域の除排雪における自助共助に関する人類学的研究」、「北海道豪雪過疎地域における広域的除排雪ボランティア構築に関する実践的研究（3）-広域的除排雪ボランティアがもたらす受入地域への影響-」（『北海道の雪氷』第33号、2014）など。

発表会の開催状況



日 時：平成27年12月4日(金) 14:00～16:30
会 場：一般財団法人 北海道開発協会 6階ホール
参加人員：61名

研究発表者 5名
大学関係者 7名
民間団体等 49名

主催者からのご挨拶

この度は、助成研究発表会にお集まり頂きまして、誠に頂き有り難うございます。

北海道開発協会は、昭和38年1963年に北海道開発の推進と開発関係者の福利厚生を増進を図る為に設立された公益法人です。

3年前には一般財団とし再スタートし、一昨年に通算し50周年を迎え、財団としての仕事ですが、公益事業の主なものは、北海道開発に関する調査研究ということで、我々の研究所がコモンズ、ソーシャル・キャピタル、インバウンドという数件のテーマを元に調査、研究を行っております。

それから、北海道開発に関する広報活動および出版というものがございまして、この「開発こうほう」という広報誌は毎月5,000部を発行しております。こちらは、北海道の地域課題の取り組みや行政情報をレポートやエッセー、座談会、対談といった形で幅広くご紹介をしております。それから関係機関のイベント状況も網羅しております。こちらから申し上げるのも何ですが、外部の評価も高く大変為になる冊子だと評価を受けております。

全道の179自治体だけではなく、国や道、金融機関、大学図書館、あと身近なところでは、道の駅にもこの冊子を置いておりますので、お近くで読む機会がありましたら、手に取って頂ければと思います。

ためになる広報誌だという評価を受けております関係で、もし賛助会員になって購読したいというご希望がございましたら、そちらのほうも宜しく願いしたいと思っております。

この公益事業の他に講演会、研修会、協賛、助成活動などがございまして、この一連の公益活動の中に地域活性化のために活動する団体への助成や今回の発表に直結する研究助成。この二つの助成制度を持っています。

この研究助成ですが、研究助成とこの助成研究発表会。研究助成を開始したのが平成14年で、以来、毎年30~40件の申請があり、27年度までの通算では、402件の応募を頂き、内117件。競争率では3.5倍ですが、助成を行っております。関係した研究者の総数は、270名に達し、先生方とのネットワーク、これも協会にとって、目に見えない非常に大切な財産の一つです。

それから司会者席には、平成28年度の実務要領が置いてありますが、もし関心がある方や、今年申請してみたいと方がおりましたら、是非、持参してご覧頂きたいと思っております。

この助成対象ですが、北海道の地域が直面する課題解決に向けた社会科学分野の研究でかつ、今後の北海道開発に積極的に寄与するものとしております。

助成対象者は、高専、短大以上の大学高等教育機関で研究活動をされております個人、またはグループになっております。

発表会の方ですが、2件なし4件の方々に概要を発表して頂いております。今回で、11回目となります。過年度の助成研究の幅広い研究の中から関連性のある研究を選定しますが、必ずしもピッタリとあうようなセグメントとならない組み合わせになることもあります。といいますか、AとBというテーマの幅を広げる方法で、行っておりますので多少無理がある場合もあります。

それでも女性と地域ビジネス。地域資源と情報発信。あるいは昨年は、雪の経済とボランティアシステム。というタイトルで毎年研究発表を行っておりますが、今年は、「北海道の歴史文化

と観光」というタイトルにさせていただきました。

既にご推測されているかもしれませんが、このところのインバウンド観光が、食・景観・温泉ばかりではなく、北海道の歴史文化が注目され始めたこと。あるいは北海道が誇るべき、資源として歴史文化をもっと発信する必要性が高いというようなことが、テーマの背景にあります。

これから、1件当たり20分ずつ発表をして頂き、3件終了後にまとまった時間をとって、質疑と意見交換をさせて頂く予定でございます。一見バラバラに見えるような、個別の研究ですが、最終的には串刺しができるような、ヒントやテーマが見えてくるのではないかと期待しております。以上簡単ではございますが、ご参加のお礼と協会のご紹介をさせて頂きご挨拶と致します。

一般財団法人 北海道開発協会
開発調査総合研究所 所長 草 苅 健

研 究 発 表

『北海道における先住民文化遺産観光の展開可能性に関する比較研究』

北海道大学創成研究機構 特任助教 岡田真弓
北海道大学大学院文学研究科 博士後期課程 高崎優子
(本報告に関係する資料は、41ページ以降に掲載。)

岡 田： 只今、ご紹介に預かりました北海道大学創成研究機構の岡田と申します。本日は、平成 26 年度北海道開発協会研究助成を受けて同大学文学研究科の高崎と共に実施致しました、「北海道における先住民文化遺産観光の展開可能性に関する比較研究」について、ご報告いたします。

【アイヌ文化振興と観光】

皆様もご存じのとおり、北海道の観光入込客数は年々増加しており、昨年度の報告書によれば、平成 26 年度観光入込客数は、前年度比の 1.3%増の 5,377 万人です。その内、訪日外国の来道者数は円安基調の継続些少要件の緩和、免税制度の拡充などの追い風を受けまして、前年度比の 33.7%増の 154 万人となっています。来道者数の総消費額も年々増加しており、北海道経済に占める割合も増していると言えます。

また、本日の発表のもう一つのキーワードでありますアイヌ民族についてご説明いたします。アイヌ民族は日本列島北方、とりわけ北海道に先住し、独自の文化を発展させてきました。しかし、近世以降に実施された日本の同化政策によって、文化・生業・共同体に多大な打撃を受けました。近世以後、長らくアイヌ民族を取り巻く状況は改善されてきませんでした。1997年に施行された「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」により、同法に基づいたアイヌ文化の振興が積極的に実施されるようになりました。さらに 2007 年の「先住民の権利に関する国連宣言」に続いて、2008 年に衆参両院で採択された「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」によって、アイヌ政策をより推進し総合的な施策の確立に取り組む考えが示されました。2020 年には、アイヌ文化を多角的に伝承・共有できる施設を備えた、民族共生の象徴となる空間のオープンが予定され、アイヌ文化の振興とその他の施策を総合的に活用する試みが官民をあげて進められております。

こうした動きの中で、アイヌ文化が日本が持つ文化の多様性の一つとして認知されるだけではなく、北海道の観光において大自然や豊かな食といった従来の魅力に変わる新たな要素になると期待が寄せられています。また、アイヌ文化振興とそれに関する施策という側面からも、経済活動などとの連携の重要性が指摘されております。

アイヌ文化の振興と観光発展がセットとして語られる一方で、両者の間には歴史

的に内在する課題もございます。例えば、過去に見世物的要素が強かった観光アイヌを避ける風潮があります。また 1970 年代から始まった北海道観光ブームの中で、木彫りの工芸品などの伝統的技術を活かした生業の誕生が期待されましたが、近年に至るまでそうした独自の伝統的技術を活かした産業を確立出来なかったという事が指摘されております。

観光事業者の主体側になれなかった事に伴い、いわゆる北海道に住む日本人、(和人)によって先住民文化が適切に観光資源化されなかったという事例も起きております。また、西洋的な文化遺産概念と異なる特徴を持つ先住民文化遺産を適切に来訪者に伝える手法にも留意が必要だと言われております。

アイヌ文化は独特の精神文化によって意味が付与された景観、口承伝承、舞踏といった無形文化遺産が特徴といえます。従って、観光化する際には、多数派が属する文化とは異なる文化体系によって意味づけされている世界の理解を促進する必要があります。

この配慮が欠けたまま観光資源化が行われますと、来訪者にアイヌ文化の本質が適切に伝えられない可能性が生じてしまいます。本研究では、アイヌの歴史・文化に関わる文化遺産を、文化交流の手段として適切に観光の中に組み込み、また生業として成り立つ先住民文化遺産観光のあり方を検討することを目的としております。

【沖縄県と道内における先住民文化遺産観光の事例】

今回の報告では、北海道と同様に日本史の趨勢とは異なる歴史と文化を育み、かつ現在では観光を基幹産業として重視する沖縄県の事例を踏まえ、また道内でアイヌ文化遺産を積極的に観光の中に取り込む試みを行っている、平取町、斜里町知床、旭川市の事例から得られた知見をご報告したいと思います。

次に報告内容を簡単にご説明したいと思います。沖縄県はアイヌと同様に大和の歴史とは異なる歴史を持ち、また近世・近代の激動の中で、文化継承に幾度とない危機を経験してきました。一方、2014 年には観光入込客数が年度比 9%増で 717 万人、総観光消費額は前年比 19%増の 5,341 億円強となっており、観光が県の重要産業として位置づけられております。リゾート地としてのイメージが先行してまいりましたが、2000 年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が世界文化遺産に登録されたことにより、沖縄の歴史・文化が高く評価され、人々の目が文化的な側面に向けられることとなります。

アイヌと通ずる歴史的背景を持ち、かつ観光を基幹産業として重視する沖縄においては、すでに沖縄独自の歴史・文化を活用した文化遺産観光がさまざまな形で展開されており、北海道と比較すべき先行事例として捉えることができます。今回の調査では、スライドにありますとおり 7 組の方々にお話しを伺いました。4 組が市町村の文化財課の担当者、3 組が実際にガイドツアーを提供している事業主あるいは、ガイドの方々でございます。

また、既に「開発こうほう」に取り上げられているとおり、北海道においてもアイヌ文化と観光の可能性については、積極的に議論されております。今回の調査では平取、旭川、知床において、アイヌ文化遺産を活かした観光発展に取り組んでい

る 10 組の方々に話しを伺いました。3 組が市町村の観光課、あるいはアイヌ文化振興や施策に関わる担当者、2 組が博物館関係者、3 組が実際にガイドツアーを行っている事業者あるいはガイドの方々、2 組が民宿経営およびアイヌ工芸に携わっている方々でした。

【文化遺産ガイドの重要性】

これらの調査から得られました先住民文化遺産が観光を通じて適切な文化交流の手段となるための要素として、まず文化遺産ガイドの存在を指摘したいと思います。

自らの言葉で、遺産の価値を語るガイドの存在は、観光客の文化遺産経験を豊かにし、独特の文化体系に意味づけされた先住民文化遺産への理解を促すと言われております。沖縄では、本土とは異なる歴史に対する県民教育の一貫として積極的な文化遺産ガイドの育成が実施されてきております。事例として、世界遺産を対象としたガイドシステムについて見てみたいと思います。

沖縄の世界遺産エリアを中心に、スライドの表にありますように、6 つの市民ガイド団体が活動しております。これらのガイド団体のガイド養成講座の主催は各自治体です。那覇市では、ガイド養成講座修了後もフォローアップのために、市の文化財課が年 5 回程度の文化財講座を市民に提供しております。また、行政による養成講座修了後も、ほぼ全てのガイド団体で自主勉強会が継続されています。他の市町村への視察研究、文化財の巡検、構成資産の美化清掃、情報発信などの文化財 PR などの活動も行われ、ガイド団体そのものが遺産のサポーター的役割をしていることが明らかになりました。

さらにガイドが観光客と同伴する場合には、文化遺産を巡る禁忌事項なども遵守されやすいため、適切な文化遺産観光が実施されるということも分かりました。単なる観光ガイドでないこのような市民による草の根的活動は、文化政策として地域の遺産を保護活用する点で示唆に富んでいると言えます。

北海道の事例調査では、沖縄のように市民ガイド団体が観光客と同伴しながら遺産を巡るというスタイルのガイドの実施は確認できませんでした。しかし、道内でも先住民文化遺産ガイドへの試みは少しずつ広まっているようです。

例えば平取町では、重要文化的景観の活用と普及啓発事業の一環として、重要文化的景観ガイド、通称「地域ホスト」の育成が開始され都市住民を対象としたモニターツアーが企画されております。

またアイヌ文化の保存振興において経験豊富な旭川市でも、市博物館の学芸員がガイドをつとめるアイヌ語地名ツアーが 2015 年から実施されるようになっております。このツアーでは、単純にアイヌ語地名が残る場所を巡るだけでなく、トレイルの中で見られる考古遺跡の立地や性格、遺跡とアイヌ文化との関係性、チャシと呼ばれる遺構に残された伝説、伝説と地名の由来、アイヌが利用していた植物といった幅広いコンテンツがツアーに盛り込まれています。

【先住民文化遺産への課題】

知床では、アイヌ民族ガイドが口承伝承を交えながら遺跡を紹介するツアーが 10 年目を迎えています。その中で課題も指摘されています。北海道では未だ根強いエコツアーへの需要があり、また、アイヌ文化への認知度もあまり高くないことか

らアイヌ民族ガイドのみで生業として成り立たせるのは未だ困難な状況にあります。

これは沖縄の場合も同様で、未だリゾート観光の需要が優位であり、文化ガイドはボランティアに支えられている側面が大きいと言えます。そのためツアー単価が概ね低く、経済活動として成立するのはまだ先のようなようです。ただ長期的な視点で見れば、既存のキラ・コンテンツのニッチを埋めるものとしての文化観光、あるいは沖縄県のように社会基盤整備や文化政策の一貫としてスタートして、先住民文化遺産の認知度を高めていくという作戦は現実的であるともいえます。

二点目に先住民文化遺産として、何を捉えるかと言う点です。昨今、文化遺産管理の流れとしては、国や市町村指定を受けている著名な文化財だけではなく、生活の中で生まれ継承されてきた有形・無形の遺産を市民の手で保護することが推奨されています。しかし、従来の法的枠組に含まれない無名の文化遺産、あるいは、既に記録保存されていたものの活用されていなかった文化遺産をどのようにして経済活動である観光に組み込むかは、先住民文化遺産に課された課題の一つといえます。例えば、独自の民族文化を活かした遺産観光が発展している沖縄では、1980年代以降に全島的に作成された字誌や市町村史がこれらの素地となっているといわれております。

北海道でも行政・学術発掘による明治期以前の北海道のダイナミックな先史時代の物質文化が記録保存されていることは皆さんもご存じのとおりでございます。また研究者個人による記録保存、そして近年施策として進められているアイヌの歴史・文化の保存・復興と、北海道にも多くの文化資源の原石が存在しています。一方で、こうした文化資源の掘り起しや活用方法の議論には、時間と人手がかかるのがまた事実です。

旭川や知床での調査によれば、そうした文化資源の蓄積は、市民イベントや社会教育で活用されているものの、本格的な観光資源に組み込まれるまでには至っていないということが分かりました。ただ、歴史的に多くの文化財が豊富に残り、北海道で最初の文化的景観の指定を受けた沙流川流域に位置する平取町では、地域の資源を活かした持続可能な産業創造という枠組の中にアイヌ文化遺産の保護と活用を組み込み、生業に結びつく先住民文化遺産の観光発展を目指す施策が行われております。平取町では、発掘調査やアイヌの人々への聞き取りから得られた有形・無形のアイヌ文化遺産の保護・活用を、地域の経済振興とセットにして考え、平取町役場では部門横断的に施策を展開しております。アイヌ文化を含む地域の特徴ある資源を包括的に継承発展させるために、これらが生業に結びつくように行政が支援する本事業は後にご説明します「歴史文化基本構想」と通底する部分も多いかと思っております。

【信仰遺跡群と観光】

最後の課題として、先住民文化遺産の保全と活用について述べたいと思います。先住民文化遺産群の中でもこうした問題が顕著に表れるのが、沖縄でいうと御嶽(ウタキ)、アイヌの場合では、チャンやチノミシリといった信仰に関する遺産群だと思います。本来であれば観光にとっての訪問客数の増加は喜ばしいことです。しかし、

それが問題となるのは、当該文化遺産が聖域という人々の精神文化の基層をなす空間であるからです。これらの空間は、現在でも伝承者あるいは当事者たちの私的な空間であり、また当該精神文化を基点として形成される親密権であるため、基本的に外部者がその空間を犯すことは許されておられません。但し、表層的な異文化を避けようとするればこうした精神文化の基層部分へのアクセスは不可避であると言え、ここに亀裂と葛藤が生じることとなります。こうした葛藤を抱えているのが沖縄県の世界遺産に含まれる御嶽と呼ばれる空間です。

世界遺産の一つであります南城市の斎場御嶽（セーファウタキ）は、元来沖縄の創成神による琉球開闢七御嶽の一つに数えられ、現在も沖縄最高位の聖地として強い信仰を集めております。しかし、世界遺産登録後に祈りを目的としない一般の観光客が急増した結果、御嶽内で観光客が香炉と分らず香炉に上がる、ふれてはいけない石にふれるといった禁忌行為が多発するようになりました。増え続ける観光客とそれに伴う維持管理業務の増大に対応するため、御嶽を管理する南城市は2007年に御嶽入口前に歴史学習体験施設を整備し、御嶽入場前に事前レクチャー映像の視聴を義務付けました。また、斎場御嶽のガイドを務める市民団体「アマミキヨ浪漫の会」は「守り人」という制度を設け、常に守り人（市民ガイド）を御嶽内に常駐させ、御嶽内の美化清掃の他来訪者の逸脱行為がないかを見て回り、必要の場合には観光協会本部や文化課に連絡を行う体制を整えております。文化財としての保全と聖域であることを踏まえた観光活用との両立には、関係各所の連携と情報共有が必要であるため、南城市ではこのような管理体制をとって課題の解決に努めております。

文化遺産の中に現在も生きる人々の精神文化が深く関わる事項が含まれている場合には、地域に対するマイナスのインパクトを低く抑えるためのコーディネーターが必要とも言われています。

【先住民文化遺産観光の展開に向けた提言】

以上の点を踏まえ、最後に先住民文化遺産観光の展開に向けた提言を行いたいと思います。現時点で有効だと考えられるのは、「歴史文化基本構想」の枠組であります。「歴史文化基本構想」は、文化庁が2007年に提言した構想で、地域に存在する文化財を指定・未指定に関わらず広く捉え、文化財をその周辺環境を含め総合的に保存活用するための枠組と言えます。事業対象に選定された南城市は、現在、教育委員会文化課を中心として、文化遺産保全と活用のための社会体制作りに取り組んでいます。同市は、基本構想策定のため2008年から近隣住民を対象としたワークショップを開き、地域の遺産を掘り起こす作業を行いました。その内容は、1集落最低4回以上、さらに地区役員や区長レベルで数回、若者や女性にも積極的な参加を依頼して回る丹念なものでした。先ほども申し上げましたとおり、法的な保護指定を受けていない文化財を掘り起こすには時間と人手がかかります。しかし、南城市はこうした作業を一般市民にとって日常生活に殆ど縁のない文化財と市民との距離を縮めるため、あるいは市民の中にある大切な地域の歴史・文化を掘り起こす為の作業として実施し、その活用方法を模索しております。こうした姿勢は、活用の最も端的な例である観光を巡っても起こりうる先ほどあげた課題にも応えるものと

なります。構想実現の為には、文化課だけではなく都市計画課、産業課、観光課といった部門横断的な行政側の取組が必要となります。

北海道の状況を見てみると、道内数カ所で進められておりますアイヌ文化振興施策やイオル再生事業もこうした取組への布石として活用できる可能性があります。

「食」、「開拓」といったイメージが先行してきた北海道の歴史・文化を再考し、多様な文化遺産の価値を健在化する基盤となり得ると思います。また、実際に先住民文化遺産を観光に組み込む過程で、遺産を保護しつつ先住民族とどのような連携を多数派社会がとっていくべきかという点については、国際社会で2000年以降いろいろと議論がなされてきました。時間の関係で今回は割愛致しますが、今後、行政、アイヌ民族、地域が連携しながら、こうした活動を進める際の参考になるかと思えます。

北海道と沖縄という独自の民族文化を持つ地域で、それらの文化遺産を活かした観光の実態調査及び課題抽出を行いました。調査結果からは、別々に進められてきた文化振興と観光発展を含むその他の事業が連携し、社会基盤整備の一環として先住民文化遺産観光が発展していく必要があることが指摘できたと思えます。

これらの課題解決策として「歴史文化基本構想」の枠組を紹介しました。個人や民間の努力では限りがあることでも、教育機関や文化機関との連携を図り、アイヌ文化にふれることがホストである北海道の地域住民にとっても、来訪者にとっても当たり前になっていく過程で、先住民文化遺産観光が発展する可能性があるということ述べて発表を終わらせて頂きます。ご静聴有難うございました。

< 質疑応答 >

中 川： 有難うございました。ここで少しお時間を頂きまして、先住民文化遺産観光の展開可能性に関する比較研究として、ご発表を頂きましたが、今のご発表の中でもう少し聞いてみたいというようなご質問等があれば、少しのお時間ではございますが、お伺いしたいと思います。ご質問等がある方は挙手の上お願い致します。

会場A： ノーステック財団の田中と申します。ご説明有難うございました。先ほど、訪日外国人が増えているとのご説明もありましたが、北海道の外国対応や外国人の対応がどのようになっているのか教えて下さい。

岡 田： 私が知っている限りでは、解説版やパンフレットの多言語化の他に、外国からの観光客には観光通訳士の方が説明するというやり方で対応しているようです。

会場A： 通訳の方は専門的な知識が無いと思うので、実際のガイドの専門的知識を有した方が説明した方が理想だと思いますが、その辺どうお考えですか。

岡 田： 観光ガイドを外国語で行う通訳案内士の方々の中では、内輪でアイヌ文化に関する勉強会をされている方がおられるようです。正しい知識がないと、通訳する際に間違った情報を与えてしまう可能性があるため、アイヌの歴史文化について幅広く取り上げ、学ぶ機会を設けていると聞いた事があります。

会場B： 石狩川振興財団の森田と申します。沖縄と北海道のアイヌとの比較検討ということですが、一番大きな違いは、沖縄は元々琉球王国があって、多くの方が琉球民族

で、北海道の場合は、どちらかと言えばアイヌの方はマイナーになっています。沖縄の方がガイドツアーをすると元々自分がそういう民族であり、固有の文化を受け継いでいるということですが、北海道では、アイヌの方々が主体となってガイドツアーをするのか。あるいは和人（日本人）がやるのか。というところで大きな違いがあると思います。そのところはどのように考えればよいのでしょうか。特に北海道の場合にアイヌの血を継いでないような人が積極的にガイドツアーをすることについて、どのように考えればよいと思いますか。

岡 田： ご質問有難うございます。その点は確かに沖縄と北海道において先住民族と和人次どちらがマジョリティーなのかということもありますが、最初の申し上げたいのは、沖縄の市民ガイドの中にも、実は島外出身も含まれているということです。このことは、誰の口によって語られるガイドが本物なのかという、根本的な質問の解決にはなっていませんが、島外出身者が沖縄の事が好きで、その地域の歴史・文化を市町村の提供する勉強会によって深く学んでいくことで、自らも多くの人に魅力を伝えたいと思い、市民ガイドになるということは、しばしばあるようです。

島内出身者と島外出身者の中で、市民ガイドの質や内容をめぐって衝突がないわけではありません。但し、一概に何年以上住んだら島内出身者として認められるのか、あるいは島内出身者でないと土地の歴史を語ってはいけないのか、という点は関係者の間でも葛藤があるようです。

北海道の場合でもそうですが、誰の口から語られるガイドが良いのかという点は、調査の間でもずっと高崎と議論をしてきました。文化の担い手以外がガイドをする場合に留意すべき点があるとすれば、独特の精神文化に裏付けられた文化を来訪者に分かりやすく伝える時の言葉の言い換えのニュアンスにあるように思います。例えば、沖縄では、御嶽が神社と言い換えられることに違和感を覚えたり、北海道ではチャシが聖地と表現されることに対して違和感を感じたりするという声を聴きました。こうした齟齬をどのように解消していくかが課題かと思います。

今回の発表でも少し触れたとおり、ガイドを担うのが誰であれ、はじめにその地域のことを徹底的に学び、その後も自発的に地域の文化資源を探求し続けることとなります。こうしたプロセスを、アイヌと和人が一緒に経ることはむしろ価値のあることであり、先ほど述べた齟齬が解消される一助にもなると思います。

会場B： 合わせて言いますと生業という言葉が使われていますが、アイヌ文化ガイドを生業にするといった時に、アイヌの方々を意識している分けではなく、日本人やそれ以外の人達が、別に生業にしても構わないという考えでしょうか。

岡 田： その答えは非常に難しいです。今のご質問は、和人がアイヌ文化遺産ガイドに参入してしまうと、本来の文化継承者であるアイヌが生業として成り立たせられなくなってしまわないか、という懸念からだと思います。報告書の最後に書きましたが、アイヌ文化遺産観光というのが、誰の為になされる観光なのかという点は、時間をかけて議論をした上で、この課題に対する対応を見つける必要があります。こうした議論が頻繁に行われておらず、我々の調査からも明確な対応策は見つけれませんので、お答えは保留にさせて頂きたいと思います。しかし、アイヌ文化遺産観光の展開を進めていくなかで、誰が育ててきた文化なのか、誰が継承してきた

文化なのかを皆が認識したうえで、北海道の魅力の一つとしてアイヌ文化遺産を活かす方策を考えていくべきかと思います。

中 川： 有難うございます。それでは、これで岡田先生による発表のお時間を終わらせて頂きますが、後ほど全体としての意見交換も予定しておりますので、また何かご質問等があればそちらの方でお願い致します。以上、岡田先生によるご発表でした。ありがとうございました。

では、続きまして南先生からご発表をお願いしたいと思います。南先生の研究助成は、平成 26 年度に受けられた助成研究で、現在、全国治水砂防協会で常務理事をされておりますが、この研究助成を受けられた際は、北海道大学農学研究院にて特任教授としてご研究をされたものとなっています。

それでは、「アイヌ伝承と地名から見た北海道における災害危険箇所」についてのご発表をお願い致します。

『アイヌ伝承と地名から見た北海道における災害危険箇所』

一般社団法人全国治水砂防協会 常務理事 南 哲行
(本報告に関係する資料は、51ページ以降に掲載。)

南 : 皆様、こんにちは。今日はこのようなお時間を頂き有難うございます。今ご紹介を頂きましたように、現在は東京で別の仕事をしておりますが、北大で勤務していた時に助成を受け研究をした内容です。それでは報告いたします。

【研究に至るきっかけとなった貞観地震と東日本大震災】

何故、この研究を行ったのか。一番のきっかけは、東日本大震災です。この時、国土交通省の職員で、危機管理担当として総理官邸の地下 50m、60m と言われる危機管理室で対応をしていました。その際、福島第一原発が津波に襲われて爆発している映像を観ました。その後、何故爆発が行ったのか、色々と議論がなされた中に、貞観地震（869 年）による津波と今回の津波がほぼ同規模ということを指摘されました。以前にも原発の安全性の中にどういった外力を入れたらよいかを議論されておりましたが、その当時、貞観地震は、未曾有のことであるとして、そこまで考えなくてもよいのではないかとということになったと聞きました。

ただ、私が非常に残念に思ったことは、貞観地震で発生した津波を防災上の「想定」として電源をもう少し高いところに敷設していれば冷却器が止まることはなかったのではないかとということです。その後の議論の中で、出てきたのが「想定外」という言葉でした。当時、いろんな人が「あの現象は想定外のことです」と言ってしまう、責任逃れをしたようにも受け止められ、「計画外」は分かるが、「想定外」はないだろうと世間からは大変な非難を受けたわけですが。過去の現象に対して何が起きるか分からないとして、ある程度の対応を考えておくのが防災だと強く避難されておりました。そこから出てきたのが防災にとって、2 つのことを考えなければならぬのではないかとということです。一つは対象となる現象を幅広くとる。もう一つは時間軸を長くとるということです。

【防災から減災として人命を守る】

私は防災に長く関わってきましたが、「日本政府は概ね 100 年間に起こる現象に対して国民を守る」ということが一貫しておりました。しかし、東日本大震災によって、それだけでは駄目であり、想定すべき対象にはいろんな現象があり、「防災」は難しくともそれらに対して「減災」するという考え方が必要だとされました。

私が建設省に入った当時（1977 年）には、減災ではなく防災だという考え方でした。すなわち災害を防ぐということです。しかし、災害の対象が時間の経過とともに広がってきたことで、経済性の面から災害自体は止められなくても人の命だけは救おうとか、先ほどの貞観地震のような国家的大規模な被災、あるいは非常に大きなダメージを発生させるような施設は、減災を行っていくという考えになったわけです。このことは全国的な動きです。

ではどうすればいいのか。全国のいろんな古い資料を調べ、地域で発生した過去の災害履歴を調べるために、現在では、古文書は簡単に読めませんが努力をして調

べたりする研究者が増えてきたとも聞いています。

【アイヌ文化から読み取る災害の歴史】

では、開拓以前の文字による災害記録がほとんど見られない北海道ではどうすればよいのか。そこで、私はアイヌ民俗の方々が作ったアイヌ文化の中に何かヒントが残されているのではないかと考えた。たとえば貞観地震（869年）まで、遡ることが出来なくても何らかの方法があるのではないかと考えました。

一つは、地名です。地名にはいろんなものが残されています。これはアイヌ語だけではなく、関西、特に阪神間は花崗岩地帯が広く分布していて、昭和13年には谷崎潤一郎の小説「細雪」の中でもでてきますが、阪神大洪水といひ六甲山から滝のように土石流が流れてきて、山が真っ白になって、夏でも六甲山が雪で覆われているかのように見えたと言われていました。回りの地名にも火打、これは花崗岩どうしがぶつかる火花が出るからだと考えています。そして石と石がぶつかるような現象とは土石流だと考えられます。他にも石出と言って、「（土石流で）石が出る」ということを連想させる地名が残っています。従って、北海道においても、何らかのヒントになるアイヌ語の地名があるのではないかと考え探してみました。地名として残すには、災害頻度がある程度高いということが言えると思っています。

それからもう一つ、古文書がなくても災害が伝承されていることがあるのではないかと考えました。この伝承は、先祖が子孫に対して、命を守るための教訓を残すということで、いろんな災害の前兆現象が隠されていると考えたわけです。

伝承には、発生頻度は低いが、被害が大きい。地名には発生頻度は高いが、被害が日常的な災害。このように考えて研究を行っております。そしてその事例に対しては検証するという、本研究では三つの柱を立てて行っています。

【地名から読み解く自然現象】

災害に関するアイヌ語の地名についていくつか紹介をさせていただきます。

北大のアイヌ研究センターの先生方に文献を紹介して頂き、短時間に調べるなら山田秀三先生を超える本は見当たらないとご示唆いただき、この本（「北海道の地名」）を分析しました。大部分の地名は、地形を示すもので、崖地、窪地の形状を表現して名付けているということです。文書中にも出てきますが、地名をまったく知らないところに行った時でもこういう地名か、と聞くと大体当たっているということが書かれています。

事例として、最も身近な札幌。サツは、乾いた。ポロは、広いや大きいという意味です。今では札幌市街地は、低平地にも広がっていますが、元々は豊平川流域の比較的ゴロゴロと石のあったところを言ったようです。あと十勝地方の札内川も確かに川に石がゴロゴロと転がっています。石が転がっているところがどういうところか。石を運ぶために大水が出た、あるいはそれを供給する山崩れがあったという場所です。そういう現象に伴って、災害が発生していたと見るべきです。

次の事例はポロピナイ、ポロは大きな、ピは石、ナイは沢です。千歳の支笏湖畔にポロピナイ川という川があり名前は美しい感じを受けますが、現在という土石流危険溪流という名前を付けたのと同じだと言えます。現に一昨年には土石流が発生し、長期に渡り国道が不通になりました。

従って、ポロピナイとか、ピン、ピが付くと、どうしても当て字として「美」という漢字を当ててしまいますが、騙されてはいけないと思った次第です。また市内の話ですが、豊平は、トイ、ピラ、崩れた、崖という意味です。現在の豊平川をJRの付近から見ると安定した川のように見えますが、上流に行くと崖地が連続していて、それが崩れて中流部に堆積しサッポロ、乾いた広い（土地）と名付けられたのではないかと思います。

もう一つは、形状ではないですが、ウェンとついている土地は悪いとう意味があります。ナイは川です。従ってウェンナイ川とは悪い川、何か悪い事をする川というように思ってよいという事です。

それから、新十津川町に徳富川が流れていますが、この字から災害を連想することができるでしょうか。トックというのは隆起を意味するそうです。地面が隆起すると言いますとすなわち地滑りです。現に徳富川流域を調査しますと大きな地すべり地が連続していました。昭和25年には山津波の記録もありました。

次にトゥコタン。1977年の有珠山の噴火の際に四国地建から北海道庁へ出向し、仕事で有珠山の周辺を調査していた際、トコタンという集落があり、土地が盛り上がっていたため、その当時から気になっていましたが、そこは火砕流で廃村になった地域のようなものでした。

それからカムイ、神のいるところは近づくな。霊山、霊峰といろんな意味で近づかせない。つまり何が起こるか分からない、それを神と呼ぶ事にしたのではないかと。カムイが付くと怖いところだという認識が必要だと思っています。

それから面白いところでは、琴似は、低いところ。琴似というところがあると水につかるかもしれないというように思うことも大事です。

これも関西のことですが、土地を買う時には、クボとついたところは私は絶対に買いません。漢字の当て字であっても、久しいや、クボというのは窪地の意味があります。そういう土地は浸水の危険性が高いと思われます。ですからアイヌ語の意味で震える、燃える、こういうところは買わない方がいいのではと思います。住んでしまったのであれば、そういう現象が起こるかもしれないと思うべきです。

地名については、時間の関係で以降は割愛します。

【子孫に伝える伝承】

次に日常的ではなく長い時間の中で起こるような現象は、物語として伝承され、子孫へと伝わっているだろうと考え、アイヌ文化研究センターの先生方に参考となる文献を教えてくださいました。それらの本には、災害をイメージするような言い伝えが記載されていました。

そこから、読み取れるのは、自然災害は人間を超える力をもった神が起こし、人間では防げない。だから神のお告げを聞いて行動せよ。ということが伝えられています。すなわちそれらの言い伝えは前兆現象ではないかと思うのです。川が干上がるとか動物が異常なことを起こす。そういうことに注意する必要があるということが伝えられているように読み取れます。中には荒唐無稽と感ぜられるようなことも伝えられています。例えば千歳川の右岸側に千歳神社がありますが、そこが大きな水で山が動き、海へと流れて利尻島になったというようなことです。物理的な現象

としては起こりえないと思いますが、それ程すごい現象が起こったと考えるべきでしょう。したがって大水が出たときには侮るなどということを行っているのだと、金田一先生が書いています。私もそのとおりだと思います。内地では八岐大蛇の伝説があります。山から大蛇が出ているかのように土石流が流れ擬態化されていると考えられます。実際の土石流の映像を観ましたが、煙が立ち上りながら下流へと流れていく様子は、大蛇が山を下るようにも見えます。従ってそういうところでは土石流があるので注意が必要ということです。

さて、色々なところで助けてもらいながら資料を調査しました。Okimumpo=山津波とあります。昭和40年頃まで、まだ土石流の事を山津波と言っており、この辺の文献から出来てきたのではないかとも思っています。今は土石流という言葉で、法律にも明言されておりますが、それ以前は山津波が土石流の一般語でした。

以上からこれらの文献の有用性が言えると考えています。このような伝承は日高地方が多かったです。日高山脈は2つの島がぶつかり隆起したと言われております。隆起した山は比較的もろく、崩れやすいということもあり、そういう伝承が多いのかと思います。また、日高地方はアイヌ文化が保存されていて、伝承も保存されているのではないかと考えています。一つの例としては沙流川には津波と山津波が同時に襲来というような伝承も出てきております。そのようなことが本当に起こるのかどうかは、資料として配っていますので、見て頂くとして、このような戒めとして、避難した人だけしか助からなかったとして伝えられてあります。

日高山脈周辺の地形図を見てみます。静内には洪水や津波のマップがあり、海からも津波は来る。これは私の専門分野ですが、山体が崩壊して、土砂が河道に堆積し、それが川をせき止め下流へいくという現象です。海からと川から同時に起こるということもあり得るとする一つの事例です。

それから融雪期の山津波、これは鶴川ですが、ここでは春先に雪玉を割り中に泥が詰まっていると危ない。そういう前兆現象を子孫に残していくということです。

次に神居古潭、今でいう河道堰き止め、天然ダムの事例です。神居古潭は、行かれた方もいるかと思いますが、この区間のどこかで両岸から岩が崩れて川を堰き止め、旭川市内のどこまで水に浸かったかは分かりませんが、水たまりが出来てアイヌの人達がカヌーで人命救助を行ったと伝えられています。ここで大暴れした悪い神様とそれを倒した良い神様が戦ったことが原因とのことです。もし、岩盤崩落しても現在の施工能力では、数日間の工事で、なんとか復旧できると思っていますので、ご安心下さい。ただ、そういうところでは河道閉塞が起こるかも知れないということを行行政といいますが、防災担当の方は、日常的に考えておかないといざと言うときに対策ができません。そうすることで現代の防災にも生きてくると思います。

次に西別川です。私には水源がよく分からなかったのですが、摩周湖から地下の空洞を伝わり吹き出しているのではないかと考えております。ここも大きな天然ダムが出来て下流で大きな災害がおきたとの伝承があります。ただ、車で川沿に河口まで下ってみました。残念というのは変ですが、堰き止められるような狭窄部は結果的にありませんでした。ここで河道閉塞が起こるだろうというのがわかると事

前にシミュレーションをしておき、堰き止められた時には、どこから重機を運び込み、その重機でどのような対応をすれば良いのかが、分かるようになります。

そして鶴川の地すべりでは、「山の岬が川にせり出して」と。そんなこと起こるはずがないと思われるでしょうが、この山の岬をどう解釈するかです。ここは、蛇紋岩と言いまして、水を吸うと岩が膨らみ、地すべりが起こりやすくなります。こういうところは、山が川に向かって前へ前へと押し出し来る、そういう現象が先ほどの表現となり、山の岬が川に押し寄せるとなっています。実施に現地を見てこれはあり得ると考えたところでした。先ほどの神居古潭や西別川より対策はやっかいかと思っております。何故か、後ろの山が大きいもので、ここの河道が地すべりで閉塞され、それを掘削しても次の地すべりが押し出さそうだからです。ですから施工計画としては結構やっかいです。しかしながら行政の防災担当としては日頃からの訓練として、そういう現象が起こる可能性があるかもしれないということを考えておくことが大きな災害を防ぐための基本ではないかと考えております。

【千歳での検証事例】

ここからは、少し予定時間が押してきていますので、検証した事例を急ぎ説明をさせていただきます。千歳川では昔大津波によって近くの千歳神社の近くの山がもぎ取られ、馬追山にぶつかってから石狩川に沿って北の方に流れていき海へ出ていった、という話を先ほど致しました。現実的にはないと思いますが、山が崩れるという現象としては起こりうるのではないかと思います。そこで、私は千歳市街地を調査しました。ここからなだらかな扇状地となっていて、この辺は湿地帯です。この地形を造るだけの土砂がどこからか来たわけです。土砂は自分では動きません。必ず水という要因があり、それに押し流されて下流へと運ばれるのです。その運ぶ水はどこにあるのか。一つは支笏湖にあります。もう一つは千歳川を堰き止めダムアップ後に決壊する。その2つがあると思います。

ここでは、何がおこったのかを考えてみます。一つは噴火によって、何らかの大きな現象が行ったことが予想されます。これは恵庭岳ですが、北大理学部の研究チームでは、山体崩壊を起こしたと言っています。物理的な検証はしていないので、研究チームのものを引用し考えてみます。ここが山体崩壊し支笏湖へと流れ込み、支笏湖の水が千歳川に段波となって乗り越えたのではないかと考えられます。また、もう一つは樽前山の噴火では、千歳川の間地域一面が火山灰で覆われております。この火山灰と倒れた木が、千歳川の溪谷部をせき止め、それまで溜まっていた砂礫を一気に下流の平野部に押し流したのではという仮説です。

ここは道の駅「サーモンパーク」です。その駐車場予定地で掘削をしました。千歳市の協力を得てトレンチ掘削を行い掘削断面の観察をしました。その断面が上から下までが火山灰層だと先ほどの仮説は成り立ちませんが、学生達と一緒に砂礫層を探すと火山灰層に挟まれる 3cm 程度の粒径の砂礫層を見つけることができました。すなわち、土砂を大量に含んだ大規模な洪水があったことが言えると考えられます。本来はトレンチ掘削を市内の広範囲で行うと面的に確かな情報になるのですが、残念ながら 1 地点しか行っておりません。発生日代を調べるために砂礫層から出てきた木片を用いて年代測定を行ったところ 1700 年くらいのもものと判明しまし

た。砂礫層から出てきたことで、樽前山の噴火年代とも合い、仮説が成り立つことが言えます。雑ばくな話しでしたが、アイヌ伝承や地名は現在の防災にも十分役に立つというのが最後の結論です。もう少し丁寧な調査を行うことで、かなり有効な情報になると考えています。これで私からの報告は終わります。ご清聴、有難うございました。

中 川： 有難うございました。ここで質問のお時間をとりたかったのですが、少しお時間が押しておりますので、後半の意見交換会でご質問等がある方はお願い致します。これで南先生による発表を終わらせて頂きます。ありがとうございました。

それでは最後の発表となりますが、北海道大学観光学高等研究センター教授の敷田先生と北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士課程の八反田さんの共同研究によるご発表です。テーマは、「観光による農村と都市との創造的関係の構築に関する研究～ワインツーリズムの事例分析を通して～」についてです。それでは宜しくお願い致します。

『観光による農村と都市との創造的関係の構築に関する研究』

～ワインツーリズムの事例分析を通して～

北海道大学観光学高等研究センター 教授 敷田麻実

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士後期課程 八反田元子

(本報告に關係する資料は、73ページ以降に掲載。)

敷田： 皆様こんにちは。報告させて頂く最後となりますが、観光による農村と都市との創造的関係の構築に関する研究、ワインツーリズムの事例分析からということで北海道大学の敷田と、八反田が発表をさせて頂きます。20分間よろしくお付き合いのほどお願い致します。

【ワインツーリズムによる都市と農村の新たな関係】

私たちの研究は、観光による都市と農村の関係を改めて考えるという研究です。その事例としてワインツーリズムを用いております。なぜワインかという点ですが、ワインは日本では比較的新しい文化です。明治以降150年ほどの歴史しかありません。特に北海道では、池田町がワイン生産を始めてから50年程度の歴史しかありません。私たちの前に、アイヌに関するお話がありました。アイヌ文化は非常に長い歴史を持っていますが、私たちが取り上げた事例は比較的新しい、むしろ現代文化です。なぜ現代文化であるワインに着目したのかという理由ですが、ワインという新しい文化を作ること自体が、都市と農村の関係を変えていく原動力になるのではないかということです。研究の目的であります。人口減少と少子高齢化が進む農村における、生産活動を観光対象とする交流、即ち観光がテーマであります。これが都市と農村の社会構造の関係を大きく変えていくのではないかということです。なぜ、生産活動と改めて書いたかといいますと、農村では生産が地域の中核のシステムです。一方、都市では消費が中核のシステムです。ワインツーリズムは農村の中核システムである生産にふれるような観光、つまり観光が地域にインパクトを与える可能性が非常に高いスタイルの観光です。

現在、農村と都市との関係は役割分担の関係にあります。農村は自然が豊かで伝統文化があって、豊かな暮らしがあるというのが一般的なイメージです。現実に近いところです。一方、都市というのは文化や経済の中心で、現代文化が非常に豊かです。生産性が高く自然は不足気味ですがインフラは整っています。これが都市と農村との基本的状況です。都市と農村の間には、関係が成立しています。一般的な関係は自然や生産物を農村から都市へと供給する代わりに、都市から農村部へ支払や利用のお礼をするという関係です。基本的にこのような関係が成立しているのが、現代の都市と農村との関係で、身近な例で想像して頂ければ分かり易いかと思います。

但し、本当に農村には現代文化がないのでしょうか。都市は自然が豊かではないのでしょうか。例外はあります。農村にも現代文化はあり、現代美術が農村に展示されることや美術館があります。もっと身近な例では、カラオケやカフェもあります。

逆に、都市にも農村にあるような都市農園もありますし、自然豊かな公園もあります。こうした一部の例外もありますが、一般には農村は自然が豊かで伝統文化があり、都市は現代文化と経済活動が中心を占めています。

しかし、この関係は非常に歪んだ一方的な関係であります。この関係が入れ替わることがないのでしょかということが、今回の研究のポイントでした。実はあるというのが、今回の研究の結果でもあります。こうした指摘はヨーロッパで始まりまして、ヨーロッパの例ですと OECD が面白い指摘をしています。**New Rural Paradigm** という指摘です。OECD の報告書によりますと、OECD 加盟国の土地の 75% が田舎であり、そのうちの 96% が農地で占められています。しかし、これだけの割合の面積を占めながら、ここで生活している人々は農業就業者だけではありません。農業就業者は、こうした地域の 13% にすぎず、その他は都市に労働に出ている、もしくは農業以外の産業に従事している人が殆どです。さらに田舎の総生産が国の総生産に占める割合は 6% に止まり、非常に広い面積を占めながら生産性が低いというのがこのレポートの指摘でした。但し、現状に甘んじるのではなく、農業中心のシステムとされている田舎ですが、新たな創造産業を創出しようという提言で結ばれています。この創造産業というのは、札幌も含まれているユネスコが指定した創造都市のように、創造力に溢れた生産性が高い産業を集積し、経済的にも豊かになろうという考え方です。それと同様なことが、農村で出来ないだろうかということなのです。

【原動力としてのツーリズム】

さてなぜツーリズムに注目したかですが、こうした関係を変えていく原動力としてツーリズムは幾つかの特徴を持っています。例えば地域資源を効果的に活用できるということです。観光では、資源となるのはもともとその地域にあった地域資源であることが非常に多くあります。最初の発表でアイヌのガイドの話がありましたが、ガイドの方が説明する資源というのは、地域に元来あったものであり、作ったものや造成したものではないことが殆どです。

それから観光が持っている特徴として資源化が非常に容易であるということがあります。他の産業では生産設備を伴いますが、観光の場合では見るだけで観光資源化でき、当初の開発コストが非常に低いという特徴を持っています。

二番目の特徴ですが、地域の多様な関係者が参加出来ます。観光産業は特別な資格がいらない産業だと一般的に言われます。勿論、食品関係等は資格がいりますが、ガイドをするだけであれば、明日からでも私たちも出来るというのが観光の一つの特徴です。クオリティーの問題もありますが、友達を案内する事が出来るのはそのままガイドだと考えられます。それから非常に関係者が多いということです。観光サービスは、旅行サービスと言い換えても良いのですが、人を運ぶ運輸や食事や宿泊をさせるといように、様々な関係者のサービスで構成されております。

このように複数の関係者が、サービス提供者として時々に関わるのが観光の特徴です。産業連関が非常に強いということです。また、観光はお客さんの方から足を運んで来ていただけますので、輸送コストを考えなくても良いという特徴があります。

【エンターテインメント産業】

観光産業は一般的には、サービス業であり労働集約的な産業だと言われますが、これは一つのイメージに過ぎません。観光産業は、ある意味エンターテインメント産業です。私は原稿を持たずにお話しをしていますが、観光ガイドの方は原稿持って話すことはありません。それは、エンターテインメントだからです。観光のなかで色々と創造的な活動をすることが、可能ではないかという指摘は最近増えてきています。

観光は進化をしているという指摘があり、クリエイティブツーリズムという言葉が知られるようになっていきます。表に示すように、はじめに過去の人の創造性で作ったもの、暮らしとか文化が殆どですが、これらを消費する観光があります。しかし、こうした昔の人の創造性を楽しむのでは満足できなくなり、今の人の創造性を楽しみたいということで、体験観光、エコツーリズム、エコツアーなどが広がってきました。専門家の創造性やガイドの専門性をもとに、ガイドによって提供されるエンターテインメントを、楽しんではどうかというスタイルに、近年、変わってきています。

しかしこれが終着点ではありません。ガイドの創造性はガイドによって提供される創造性であり、自分の創造性を楽しみたいという欲求です。無論、ボリュームからいうと圧倒的に多いのは過去の創造性を楽しむ観光がありまして、その上に少ないですがガイドを使った、専門家の創造性を楽しむ観光であり、今、お話ししたクリエイティブツーリズムというのはまだ極めて少数派です。ワインツーリズムは、クリエイティブツーリズムの一つとして非常に注目できるのではないかというのが、私たちの研究です。先に結論めいたことをご説明しましたが、農村と都市との関係がどのように変わるのかを、後半で八反田から詳しくご説明を致します。今回研究の対象となったのは、ワインやワイナリー、ブドウ畑です。これらを地域資源として、農村の生産者がワインを愛好する都市住民にワインを提供するという基本パターンであれば、農村と都市が役割を分担していることに代わりはないのです。実はそうではありません。ワインを楽しむためには、ポイントがあります。農村の資源であるワインを都市へ供給するためには、農村のワイン生産に価値があることを、地域の人が理解しなければなりません。

新しく作ったワイン製造という文化を、地域で共有しない限りは生産が上手くいかないからです。地域住民がワインの地域における価値を理解し、地域資源として効果的にPRして、ワインを愛好する都市住民に提供します。但し、都市住民は地域の為に何かをしようと思ひ、ワインを飲むわけではありません。基本的にはワインを楽しみたいから飲むという、極めて個人的な自己投資のための消費行動であります。自己の欲求を満たすためにワインを飲むという行動です。この観光行動が上手く地域資源の開発と維持に繋がるような仕組みがないか。この仕組みがあれば、おそらく個人的な行動が社会的な意味をもち、社会的な投資になるのではないかというのが、今回の研究の中核でありました。その為には、この間にツーリズムが入り、この関係を変えていく。このツーリズムが変える関係というのは、農村が地域資源を提供し、都市がそれを消費するのではなく、お客さんが都市から来て地域資源であるワインを消費する時には、ワインを飲む文化を地域側で創出できるという

ことです。この場合、一方的にワインを飲む文化とワインを生産する文化が単に交差するだけではありません。この交流の場で、ワインを飲む消費文化とワインを生産する文化、景観を含めた地域資源が交差することで新たな文化を創出することになる。これが最近注目されているワインツーリズムの、実際の姿ではないかということが私たちの研究です。それでは、引き続き研究の核心部、事例に基づく研究の紹介に入って行きたいと思います。

八反田： 敷田先生の下で、ワインツーリズムを事例として、都市と農村の関係について研究をしてまいりました。**Integrated Rural Tourism** という、農村における様々な地域資源を統合した OECD の研究成果なども参考としながら進めてきました。先生のご説明にありましたように、ワインツーリズムの例で言えば、観光対象は「モノ」としてのワインだけではないということが、この研究のポイントです。具体的に申しますと、ワインもありますし、生産過程で形成される景観もあります。「地域の物語」とも言えるワイン生産に至ったストーリーや、生産地が持つ「地域の記憶」もあります。事例対象地域の1つである三笠市のジオパークの例のように、この土地が海底であったという「地域の記憶」も、大きな資源であると思います。

【ワインツーリズムを事例とした三つの理由】

ここに、ワインツーリズムを事例とした理由として、3点あげました。

一つ目はワインの特性です。ワインは土地との関係が深い製品であり、また付加価値の高い製品ですので、地域資源として注目されています。栽培地の環境条件が製品の個性として表現され、原料ブドウを速やかに栽培地で製品化するのが理想とされています。

二つ目として、ツーリズムとしての特性です。製品ワインだけではなく、景観、イベント、体験、関連する「地域の記憶」も含めて、多様な観光対象があります。さらに、研究の立場でいいますと、特定の品目を対象としたツーリズムであることから、生産と消費との関係を捉え易いということがあります。

最後は、社会的動向です。自治体等で地域振興策に位置づけているところが増え、消費者の関心も高くなってきています。

【ワインツーリズムの先行研究】

ワインツーリズムに関する先行研究の流れを申し上げますと、1996年にホール氏がワインツーリズムを、「ワイン産地を訪れワインとそれに関連の施設やイベントを楽しむ仕組みや考え方」と定義しました。この段階では、「モノ」としてのワインに着目しています。ツーリズム全体の中でのワインツーリズムの位置付けとしては、**Special Interest Tourism** という、特定層の方が関心を持つツーリズムのなかの、農村を訪問先とするルーラルツーリズムの1形態で、観光対象がワインあるいはガストロミーという、食関連のツーリズムという枠組みで捉えられています。

【海外と国内研究の領域】

ワインツーリズムに関する海外研究の多くは、ワインとフードの関連で進められてきました。定義を示されたホール氏も、フードツーリズムやワインツーリズムという本を書いており、その延長線上に研究成果を蓄積されています。一方、ワインビジネス研究のなかでツーリズムに着目したものもあります。ワインを売るだけで

はなく、消費者が産地のワイナリー訪問する消費者に、現地で販売する場合の収益率の高さに着目した成果もあります。

また、ワインに関連する世界各地のイベントやフェスティバルを紹介した研究成果もあります。国内の例としては、経営学の分野で、カリフォルニアのワインクラスターの例を参照した、北海道や山梨県内などのワイン産地に関する報告もあります。そのほかは、国内各地のワイン産地に関する事例報告が多いという状況です。

【挿入写真の説明】

これは敷田先生が撮られた写真ですが、上は、映画撮影が行われた岩見沢市内のワイナリーです。このワイナリーのオーナーは水田農家ですが、ワイナリーを開設される以前から、ワイン原料ブドウの栽培をされていました。その当時は、ブドウ栽培地を訪ねてくれる人はいませんでした。しかし、ワイナリーを開設し、製品を知って頂けたことで関東圏からも来訪者があります。長く稲を作っていただけでは得難い経験であり、驚きとともに本当に嬉しいと、オーナーは話されていました。

この写真は三笠市内のワイナリーです。1998年にブドウを植え、2002年に仕込んだ製品がリリースされ、ワイン専門家から高い評価を得たところです。ワイン産地として空知地域が注目される、きっかけとなったワイナリーです。ここで研修された方が近くに開設されたワイナリーが、下の写真です。壁にあるのは、ディスプレイ用のワインボトルです。

【国内におけるワイン消費】

ここで、国内におけるワイン消費の状況を押さえておきたいと思います。先ほど、先生は日本におけるワイン文化は新しい文化だと言われましたように、国内でワインが広く飲まれるようになったのは1970年以降です。東京オリンピックが1964年に開催され、1968年にはGDPが世界第2位になり、1970年に大阪万博が開かれ、国内外の人の往来が多くなりました。食料品等の輸入も多くなったということで、それ以降、ワイン消費は増えています。

途中の1985年に消費の落ち込みがありますが、これはオーストリアとドイツのワインにジエチレングリコールという化学物質が混入し、全国で販売されるという事件があったことによります。しかし、その後、消費は回復し増加基調で推移しています。

【事例対象地域の概要】

今回の研究で、事例対象としたのは池田町、都農町、空知南部の三笠市と岩見沢市です。このうちの岩見沢市には旧栗沢町が合併されています。

池田町の事業開始は1963年で、半世紀にわたり無借金、黒字経営を続けています。対象地域の人口減少率を昭和35年と平成22年で比べるとみると、三笠市は減少率80%を超え、地域の衰退が進んでいます。加えて、高齢化率も高い状況にあります。

岩見沢市では、ワイナリーとヴィンヤードが集中している旧栗沢町にあたる地域の高齢化率が高い値を示しています。合併され岩見沢市となっているため分かり難いですが、地域的に見れば深刻な状況ではないかと思えます。続いて、個々の事例を紹介します。

【池田町】

池田町は自然災害により財政再建団体に指定され、町財政の立て直しを迫られたなかで、唯一の資源とも言える「山ブドウ」に着目し、1963年に事業化を図った例です。以降、無借金・黒字経営を続け「ワインのまち池田」を、全国に知らしめた実績があります。この例で注目しているのは、消費需要の開拓です。先ほど申しあげたように、ワインの国内消費が伸びたのは1970年以降ですので、1963年の時点ではワインを飲む人はごく少数であったからです。

ワインを生産しても、それを飲む人がいなければ経営は成り立ちませんので、町内消費を開拓することに真剣に努力されました。町民の方々をワインの本場ヨーロッパのワイナリー視察に派遣し、約2週間をかけて各地のワイナリーを巡り、身をもって本場のワインと食事を体験する機会としたのです。人口に占める割合では、延べ5%の方を海外派遣しています。その結果、ワイン生産量の3割が町内で消費され、4割が道内、残る3割が道外で消費されています。その道外消費の開拓にあたっては、全国にある同じ町名のところなど、何らかのご縁のあるところに友の会を作って頂き、そこでの人的関係を築きながら、消費拡大を図ってきています。

【都農町】

宮崎県都農町のことは、北海道では余り知られていないかもしれませんが、全国的には有名なワイナリーです。イギリスのワイン専門誌で「お買い得なワイン」として高く評価されています。この都農ワイナリーは、実は北海道と縁があります。

「尾鈴葡萄」というブランドをご記憶の方は、おいででしょうか。20年以上前のこととなりますが、ブドウとしては早い時期の7月頃に、贈答用などとして店頭で箱に入って並んでいたものです。尾鈴連山の麓にあるのが都農町です。ブドウは傷みやすい果物ですので、海路で輸送するには品質維持に限界がありました。ジャンボジェット機が就航し、生鮮品の輸送にも使われるようになり、宮崎県から北海道に運ばれてきていました。北海道市場では高値で売れるので、一時は宮崎県産ブドウの約6割が北海道で販売され好調でした。しかし、他産地も北海道市場に参入するようになると、長距離輸送にともなうコストが負担となり、価格競争で苦しい立場になりました。そこで、新たな分野への移行を検討し、生鮮果樹市場から酒類市場に参入した例です。

ブドウは、苗を植えてから4、5年は果実が採れません。さらに、何十年も栽培し続ける果樹ですから、簡単に他の作物に転換できないので、町としては何とかして農家を守らなければならない役割があります。町の第三セクターが経営するこのワイナリーでは、そのため農家から一定水準の価格で買い取り製品化しています。そして、関係者が協力して販売しています。生産されたワインの95%が宮崎県内で販売されていますが、実際に宮崎県人が飲んでいるかどうかは別です。宮崎県は鹿児島に次いで焼酎の消費量が多く、ワインとは縁遠い土地柄です。しかし、ゴルフや野球、観光などで宮崎県を訪れる人のなかには、ワインに親しまれている方が多く、有力な需要先となっています。

そうは言うものの、都農ワイナリーでは地元の人々に飲んで頂きたいと願い、「みんなのワイン」を標榜し、実現に向け取り組んでいます。

【空知南部（岩見沢市・三笠市）】

次に空知南部の事例です。ここは民営の小規模ワイナリーが集積し、個性的で良い製品が造られています。ここで注目したことは、生産者の主体性です。最初にワイン生産をはじめた生産者は、北海道で栽培するのは無理だろうと言われていた、ピノノワールという醸造用品種を1998年に植えました。この生産者はかつて飲んだピノノワール種のワインに感銘し、自分でも造りたいという思いで植えたということです。最初に収穫したブドウを原料とした製品が高く評価されたのは、その方が農業者であったことによると思われます。入植から3代にわたって農業を続けられてきたなかで、土地の状態、気候などを詳細に把握され、生育段階に応じて作物が何を求めているのかを、体得されていたため良いブドウを収穫出来たと話されています。加えて1998年は、気象学的にもブドウ栽培に適した年だったとされています。

この地域にはワイナリーやヴィヤードが増えていますが、もう1つの注目すべきことは、生産者間の連携です。生産者間で競合するのではないかとの見方もありますが、価格で競合するのではなく質で研鑽しあっている関係です。むしろ多くのワイナリーがそこにあるというのが、各々にとってのメリットだと生産者の方々は話しています。

こうした動きを行政が察知し、ワイン産地としての空知を打ち出す施策が進められています。醸造用ブドウの栽培をしている農家戸数と耕作面積は、ともに0.1%と僅かですが、ブドウ栽培とワイン生産活動をもとに、地域のイメージを打ち出して行こうとしていることが、非常に興味深いところです。こうした施策展開の機会を創出する役割を、観光が果たしていると見ています。

【アンケート調査の結果と概要】

この研究では、2つのアンケート調査を行いました。今回はインターネットによる消費者動向に関する調査結果のうち、主な点についてご報告します。調査対象は、札幌市と東京都に居住する消費者、合わせて1,024人です。その内訳は、ワイナリーに行ってみたい希望者、行ったことがある体験者が同数の512人です。

左右の図をご覧ください。希望者と体験者が、ワイナリーの情報をどのようにして得たかを表しています。インターネットによる調査ですから、インターネットとの回答数が多いのですが、これを除きますと希望者ではテレビと回答した方が最も多いという結果でした。映像による情報の入手ということになりますので、飲み物としてのワインを体験した訳ではありません。「モノ」だけが観光誘因ではないということを示唆していると思っています。

一方、体験者ではテレビという回答数が減少し、様々な情報源をもとにワイン産地を訪問しており、そのなかには「知人の紹介」という回答も相当数あります。知人の方が体験したことを、間接的ですが情報として得ており、体験が意味を持っていると思われます。

次の図は、ワイナリー訪問に何を求めているかを示したものです。希望者は試飲、購入、限定品の購入といった、「モノ」を求めて行動していることが認められています。一方の体験者は、試飲という回答もありますが、「モノ」を指向する回答数

が少なくなり、ドライブでの立ち寄りも含め、様々な目的でワイナリーを訪問しています。

【総合考察】

これらのことをもとに、総合考察として、以下の4点をあげました。

1つ目は、生産活動を対象とするワインツーリズムにおいては、「生産活動の意味や来歴」を、生産者の方だけではなく地域の方々が理解し、誇りをもって来訪者に伝えることです。

2つ目は、生産者と消費者が交流を通して、同じくらいの歴史のなかで互いに持ち合っている文化的な蓄積をもとに、人や製品が持っている様々な潜在力を引き出し合い、新しい文化を創ることです。

3つ目は、有形のものだけではなく、「地域の歴史」や「地域の記憶」といった無形のものも資源となり得るといことです。とくに、創造的関係の構築にあっては有意であると、我々は捉えております。

4つ目は、多くのステークスホルダーの参加により、地域の誇りが醸成されるということです。参画者の間で相互に潜在力を引き出し合い、単なる「モノ」の交換ではない、クリエイティブな側面があることを、研究の成果から読み取れると思っております。

限られた時間のなかでのご説明になりましたが、この研究で私どもが意図したところは、冒頭の先生のご説明にありましたように、自己の為に投資した観光行動が、地域社会における生産者と消費者との相互の関係性のなかで、社会性を持つことにあります。観光という「関係の場」における交流を通して、双方に潜在している可能性が引き出され、社会への投資に変換され、地域課題を解決する方向に作用をするところにポイントがあります。今後も、このことに着目し研究を深めていきたいと思っております。

< 質疑応答 >

中 川： ありがとうございます。それでは、ここでご質問のお時間を若干取りたいと思います。今の研究発表において何かご質問等がある方は、挙手のうえでお願いしたいと思っております。いかがですか。

草 苺： 簡単な質問をさせていただきますが、国内におけるワイン消費の推移で、1998年頃が急激に上がっているのはどのような理由によりますか。

八反田： ご記憶にあらうかと思いますが、赤ワインのポリフェノール効果ということが言われまして、赤ワインが爆発的に売れた時期があります。それが1998年。その後、2000年頃まで高い水準で推移しています。2000年はミレニウムヌーボ(フランス産新酒)の販売が好調で、家計消費を調べると札幌市が第一位で、非常に売れました。販売が伸びた理由として、札幌市のコンビニ普及率の高さがあると思われ、そうした面でも興味深いものがあります。

中 川： ありがとうございます。それでは、他にご質問はございますか。

会場C： ワインツーリズムということでワインに特化した話しですが、行く人が都市から

ワインツーリズムに行く人はそれなりにいろいろな楽しみを見いだせるかとおもいますが、ワイナリーをしている人の立場からするとワインを作り、ワインが来る人に売れる、プレミアム付きのものをそういう人へ販売できる。あるいは食材、レストランを運営しながらワイン以外のものも売れる。といったことも考えられもしますが、そういうワインツーリズムに参加するワイナリーの方々が経済的にプラスになっているのかどうか。その辺は単にワインを作って外に売ると言うことよりも、利益は上がっているのでしょうか。

八反田：　ここは、非常に興味深いところかと思えます。ワイン生産者の方は、良いワインを作る事が優先事項でありますので、何時でもウェルカムという状況ではありません。ブドウの生育状況などによっては、今日中にやり遂げたい栽培作業上の大事な日もあります。しかし、生産者は消費者に直接会うことができ、個々との関係を築くことができるということの価値を、大きく評価していると思えます。なぜなら、その人達が自分たちのワインの成長経過を、長い目で見て一緒に確認してくれることへの期待があるように思えます。最後に紹介した、空知の例ですと、実際に直販率が75%、80%、ほぼ100%というように、個々の消費者との強い関係が築かれており、経営の安定に繋がっています。

具体的には、大口の注文があったとしても、その要請に応えようとする、毎年、買って頂いている方々との関係が途絶えてしまうこととなります。そのため、大口の方を丁重にお断りし、個々の消費者との関係を大切にしているという例がありました。生産者の方々にとっては、ワイナリー訪問してくれる消費者との交流を通して、互いの思うところを確認し合えるということが、最大の価値（利益）なのだと思います。

中川：　ありがとうございました。それでは、これで、敷田先生と八反田さんの研究発表の報告を終わらせて頂きます。どうもありがとうございました。

では、ここで、10分間の休憩を取りたいと思えます。

(休 憩)

全体的な意見交換

中 川： それでは、ここからは第2部としまして、全体を通じての意見交換として始めさせて頂きたいと思います。まず、先生方におかれましては、前方の席へ移動して頂きたいと思います。

ここからの司会は、当研究所の草薙所長にお願いし、意見交換会を進めて頂く事となっておりますので宜しくお願い致します。

草 薙： 好例により、司会をさせて頂きます。先ほど冒頭のところでA&B北海道の歴史文化と観光というものを串刺しするものはインバウンドではないだろうかと申し上げましたが、今日の発表を伺いながら分かって来たのは、必ずしもそういうものに拘らないうで北海道の観光そのものが大事な産業の一つであると言うことを踏まえて、そのファクターが実は、北海道の歴史文化であるという観点だけでも十分意味があるというように思いますので、これからは一つ一つ個別の研究というようにして頂いても結構ですので、ご質問を受けながら、行っていきたくと思います。先ほど南先生の中で質問の時間が取れませんでしたので、今日は、河川関係の方々も来ておりますので、まず、南先生のご発表に対するご質問からはじめさせて頂きたいと思います。

いかがでしょうか。

会場D： 北海道開発局の岡部といいます。危ないところは内地も北海道も地名とかで分かるということですが、逆に危なくないところというのは、地名とかでわかるのか。あるいは、そういうことがアイヌ語地名から推測が可能なものでしょうか。

南： いろいろな災害現場に行ってきましたが、結果的に丘というのが、どこにいても助かっています。その丘の上や中腹に何があるかというと神社です。東日本大震災ではお寺は結構津波の被害を受けていますが、神社は破壊されていないということです。地山のしっかりしたやや高いところがいいように思います。窪地とかは、絶対にやめられた方がよいと思います。

草 薙： 他にどうぞ。

会場E： 平取町で北海道のお手伝いをしている立場のものですが、平取町の沙流川にも津波がらみのものが来ていると。例えば、津波でヒラメがあがったところとか、鯨が打ち上げられたとか。文化伝承地のご紹介として、我々のガイドの中でもとりあげさせております。東日本大震災が起こる前からこういう関係にありましたので、最初の聞いたときには、作り話かなと思いましたが、大震災以降、これは本当の事かと思えますし、そういうツアーの中で話しますと皆さんも非常に納得されるようになりましたので、そういう意味ではアイヌ文化の伝承というのは、アイヌの方だけとか、和人とかにかかわらず共有の財産にしていくというのがとても大事な事かと日々の仕事について感じておりました。ご紹介ということでございます。

南： ご意見ありがとうございます。今回調査をさせて頂き、大変残念なのは資料が色々なところに分散していて、一箇所に集まっていない。例えば弟子屈町立図書館に行けば資料がありますと言われて行ってみましたが、図書館のどこを探せば良いのかも分

からないということもありました。今度、博物館が白老に出来るという話しも伺っていますが、写しでもいいので、何処かに集めて頂ければ願っています。もしくは、資料が北海道の平取町のどこに、あるいは弟子屈町のどこにありますということが分かっている、それをツーリズムの中に組み込んで頂ければ親しみもできるのではと思います。

会場 F : アイヌツーリズムという観点から、アイヌからくる地名とそういう物語があると非常に面白いと。関心を持って色んなところに行けるかと思いますが、調べた中で道内のどれくらいでそういう地名につきまとう物語があるのでしょうか。

南 : 数については、申し訳ありませんがよく分かりません。特に日本海側は困難でした。石狩川の河口から北へ上がっていくあたりは情報量も少なく困難でした。むしろ平取や十勝地方には資料はあります。日本海側では、多分、開拓初期から和人が入り、そういう形跡が消えていったのではと想像しています。

草 苺 : 南先生への質問は一度にここで区切りを付けまして、全体的に質問を受けて行きたいと思います。

会場 G : 寒地港湾技術研究センターの川合といいます。ワインツーリズムの関係で、私どものセンターで北海道ワインを東南アジアに輸出促進するという実証研究をしております。香港でアンケートをすると殆ど北海道ワインの地名度が無く、今、こういうツーリズムをされているところで、外国からツーリズムで来られるかたがどれくらいいるのか。それから、積極的に海外にワインツーリズム PR しているところがあるのかどうかをお聞きしたいと思います。

八反田 : ツーリズムの PR までには発展していないまでも、山梨県では海外を視野に入れた取り組みをされています。ワイン取引の中心はイギリスでありますので、甲州市の市長はイギリスまで行かれたと聞いています。甲州市を中心として、山梨県産ワインの売り込みを積極的に進めておられます。

さらに、本年 6 月、山梨県の甲州市、山梨市、笛吹市の 3 市が県と協調して、世界農業遺産への登録を目指すことを公表しております。これが実現すれば、インバウンドに繋がる可能性が大きいのではないかと考えています。

また、先ほどご紹介した都農町は、同ワイナリーのワインがイギリスと専門誌で高く評価され、何度も表彰されております。海外を視野に入れた、販路拡張策を展開されていると思います。

会場 G : 北海道のワイナリーでは、そういう動きをしているところは無いのですか。

八反田 : いまのところは、顕著な動きは聞いておりません。

草 苺 : ありがとうございます。他にどうでしょうか。今のワイナリーと世界遺産のような話しができましたのでお伺いしたいと思います。ジュネーブ湖のそばにラボーという葡萄畑が世界遺産になっているところがあります。今、北海道でも空知の等のワイナリーの葡萄畑は非常に美しい、観に行くだけでも良いぐらいのところもありますが、それだけでは、世界遺産の候補地にいずれなっていくという可能性はありますか。

八反田 : ラボーやサンテミリオンなどの世界遺産登録例があります。私も、スペインのアルトドウロやポルトガルのピコ島など、ブドウ栽培地の世界遺産に関心を持っています。これらの登録例は、何れも長い生産の歴史があり、生産にまつわるストーリーがあり

ます。アルトドウロの例は、ドウロ川に面して、ブドウ栽培の幾何学的線が横に繋がる壮大な景観です。この線は、連続的に栽培するブドウの間の作業道路の幅が、昔、収穫したブドウを積んでラバで運んだ荷台の幅に合っているのです。そういう生産の歴史が景観に反映され、そこに語るべきストーリーがあるという文化的側面があります。ブドウ栽培地の景観だけでは、世界遺産への登録は難しいと思われま

す。山梨が世界農業遺産の候補になり得るだろうというのは、この地域の栽培形態は棚づくりが主流であり、ヨーロッパのブドウ栽培地の景観とは違い、ブドウの葉が地面を覆い尽くす景観が形成され日本固有のもので

会場H： ノーザンクロス平取事務所の貝澤と申します。宜しくお願

い致します。先程は柳の方から地元ガイドということで、私は地元の案内をさせて頂いていますが、幾つかのことで、意見、複雑なことになると思いますが、先ほどの地名ですが、地名に関しては、山田秀三先生の著書を見ているということで、多分大丈夫だろうと思いつつも、今残っていない地名、というのがすごくありまして、昔のアイヌ語地名は、我々がいう和人が入ってきた時に例えば御幸町、旭町、と言うめでたい言葉に変えられていたりします。それを掘り起こすには、実は積極的に地元の人がやらないとなかなか掘り起こせない。見つからない。先ほど南先生も言われていましたが、書庫の一番奥の方にある。多分アイヌ文化に対する見方がそこです。奥に入れておいても忘れてしまっても、ほっておいても大丈夫。というのが地域の人の一部の見方であるのかもしれない。先ほど岡田先生の時の質問にもありましたが、誰がしゃべるのか誰が案内するののかにも関わってきますが、我々アイヌの立場からすると、今更そんなこと勉強をしても何の特になるのかというのが普通の考え方です。それに気づき大事だと言って発信する人は一部の研究者や、好きでしゃべりたいという人になってしまう。だからそれが大事だと言うことを外からプッシュしてあげないとなかなか気づきにくい。自分たちが大事だと発信しにくい。自分たちもいらないと言ってしまう。持っているも素直に言えば差別されるから。それを外からプッシュすることが大事なので、その過程においてアイヌでない人が話すということは大事なのかもしれません。

ただ、それをしているとアイヌ人からのやっかみとか、なんで自分たちのことを彼奴らがしゃべっているんだという複雑な心境が人間なので混ざってくる。そこを踏まえたうえで、外側からの大事だよというアピールは大事かと思

います。3年前からガイドをやらせて頂きましたが、その時にやはり皆さんが知らないのです。アイヌとツアー名に書いてあるから行ってみようという。行って見るとこんななの。よく言われるのは、本物のアイヌに初めて会いましたと握手を求められて写真を撮られたりしますが、そういう事が事実なので、外側からのツアーというものでよいので、外側からどうやってプッシュできるか。おもしろい、大事、すばらしいんだよとか、言ってあげることが、今後大事なツアーの取り組みで出来ることではないかと期待しております。質問というか意見という事になってしまいましたが、そのように思っています。

草 苺： ありがとうございます。順序は逆になりますが、高崎さん岡田さんから感想のような事を今の貝澤さんからの話しに対して、何かございましたらどうぞ。

岡 田： 私が質問を受けた時にまとめきれなかった事を端的な言葉で説明して頂きましたのであまり追加することはあまりありませんが、確か沖縄の事例を紹介した時に、内地出身的那覇市ツアーガイドの方に触れました。沖縄観光では、観光と言えば首里城で、那覇市街地は商店街と一般の生活空間であったようですが、その方は、沖縄出身ではないからこそ那覇市街地にも目新しいもの、他の観光客に伝えたいと思うことを見つけたと言っておられました。よそ者が新しい発見や土地の面白味を見つけてツアーを作っているという話を聞いた時に、一概に外から来た人の目や感覚は無視できないと思いました。色んな視点から、これは面白いとか、これは外の人にとって地域の魅力として映るという意見が地域の中に広がっていくことが大事なのかな、と貝澤さんのお話を聞いていて思いました。

高 崎： ありがとうございます。これに付け加えたいのですが、沖縄の方のガイドでもジレンマのようなものが当然あります。内地から来た人の方が、しゃべりが上手なことがあったりして、例えば、内地から来たお客に対しては、同じような言葉で返す事ができるので、そういう意味では有利という点があります。そういう事に対して、複雑な思いを描かれる方もいますが、ただ言われるように外からどうプッシュ出来るかを考えた時に良好な関係を築いている場合には、経緯が必ずそこに存在します。単純に外からみてこれはとても良いからどんどん売らしましょうとか、これはきっと人気があるだろうからやりましょうとか、そういうスタンスだけではうまくいかないことが多くて、基本的な相手の敬意を共有している場がうまくいっている場だと感じています。有難うございました。

草 苺： ありがとうございます。南先生には後先になりましたが、地名の修正についてお話しが有りましたので、どうぞ。

南： 地名の修正というのは本当にいろんなところで歯がゆい思いをしています。

十勝の幸福。こうは荒（こう）・神（じん）。それを幸福と書いて新婚さんが行って写真を撮っていますが、違和感があります。それから、私は関西で育ち、何とか台、みどり台とか、地名が変えられています。冒頭で申し上げた、火打とか災害を連想させる名前がどんどん消えていくのが、住んでいる人にとってももったいない気がしています。そういうものを大事にすることも防災につながるのではないのでしょうか。

先月、高知へ行った時に自分の生まれたところを探してみたが、地名が変わっていて分からなくなっていました。市役所でも手続きを取らないと教えてもらえず、そんな状況なので、もう少し古い地名を大事にしたいと思っています。

日光の地名もいかにも綺麗ですが、「二荒」を「日光」と読み替えられています。このように漢字に惑わされてはいけないと私はよく思っています。

草 苺： 綺麗な物は疑えと。希望ヶ丘とか、緑が丘とか。

南： 綺麗な名前ほど疑ったほうがいいのかもかもしれません。

草 苺： わかりました。次のご質問を受け付けます。

会場Ⅰ： 私も地質関係ですが、やはり地名は山田先生の本を見ながらこういうこともあるんだなど地質を観たり個人的にはしていますが、やはり古い地名は大事ですし、災害等で重要だなどと思います。そこで岡田先生に質問ですが、沖縄観光の中で最初はリゾート観光で途中から歴史文化に変わったということですが、私は98年に沖縄に行った

時には、いわゆる歴史文化派なので、建設中の識名園や琉球舞踊や焼き物を観たりしたらタクシーの運転手にお客さんたちのような人は珍しいと言われました。そのターニングポイントが何時頃で、それに何らかの誘導があったのか。もし、そういうことがあるなら北海道にも応用できるのかと思いましたが。

草 苺： では、岡田先生からお願いします。

岡 田： 高崎が沖縄調査のメインでしたので、あとから説明してもらいますが、世界遺産に登録された時のインパクトは大きかったと思います。その後に沖縄県が提示した地域づくりのビジョンの中で、歴史・文化が地域作り・観光振興の柱の一つと打ち出されたことはきっかけとなったようです。

高 崎： 沖縄を担当していましたが、世界遺産もすごく大きかったのですが、メディアの力もありました。沖縄の芸能人がメディアにも露出していったということもあり、そういう中で海とリゾート地のだけでない側面というのも沖縄もポップスのような形ですが、そういう面からも認知をされていき、合わさっていまのような形がだんだんととられていったと私は理解しています。

会場 I： 何年ころからでしたか。

高 崎： 2000年からです。

草 苺： ありがとうございます。他にはどうですか。

会場 J： 今の質問に関連しますが、北海道には自然を観たくて来る観光の方が多いかと思いますが、同時に文化遺産を観るとか、文化遺産観光メインにくるとか。どうやって増やして行けばいいのかと考えた時に対象を道内の人が良いのか道外か外国人か。今回調査された時を踏まえて考えるとターゲットをどの辺にもっていくと増やせるのかという事をお聞かせ頂ければと思います。

岡 田： アイヌの歴史・文化を活用した文化遺産観光を単純に二分してよいかわかりませんが、今は二つの要素から説明します。一つは、アイヌの方々が歴史的に生活圏として使ってきた、空間的エリアです。そこは景観、川、海、小径、動植物といった自然とアイヌ民族の生活・生業のスタイルと密接に結びついたものが含まれる空間的なエリアです。もう一つが、これまでの研究や行政の取組で保護されてきた民俗資料、考古資料、その他様々なアイヌの歴史・文化に関する物事が収められている博物館施設です。これらを複合的に含めてツアーを構成すると、ある種包括的に先住民文化遺産に対する理解が進むのかと思います。

休憩時間に会場の方とお話しをしている中で、指摘されたのが、北海道は自然環境を対象にしたツアーが多いので、天候が悪化するとキャンセルせざるを得なくなり、その時には文化的な資源が蓄積されている博物館施設を今以上に有効的に活用することが良いのではとご意見を頂きました。ターゲットを何処に絞ったらよいかというと、絞り込むのは難しいと思います。しかし、一方で考古学などの分野では、昨今、文化と環境の歴史的な関係性に注目が集まっており、私たちの祖先がいかに環境変化や環境に適用しながら暮らして行ったのかを総合的に考察するようになっていきます。そういう意味では、アイヌ民族は北海道の自然環境の中で様々な知恵を用いて文化をはぐくんできた人々です。自然を目的に来道された方にも、アプローチ次第ではその自然の中で暮らしてきた人々の歴史・文化を効果的に示すことができるかもしれません。

そうすれば、ターゲットを自然が好きな人、文化が好きな人、道内、道外、海外と絞らなくても先住民文化遺産の魅力を伝えることができるのかなと思いました。

草 苺： ありがとうございます。他にはどうですか。

会場K： 平取町役場におります吉原と申します。一点提案でもありますので、それにご意見があれば伺いたいのですが、主に南先生に関わることになるかと思えます。

アイヌ語の地名の集約は大事で、それ自体しっかりと進めなければならないと思いますが、私が良くお付き合いさせて頂いています、アイヌ民俗の高齢の方は、土地に伝わっている伝承についても詳しいのですが、一方で、自分は小さなことから科学少年をめざしていたのですが、そういう分野も好きで、災害の事で言いますと地名のことでボーリング調査を結びつけて一緒にすればよいと。いうことで開発局の職員がおられるような研修会やフィールドワークで何度か提案をしましたがあまり、具体的にはなっていない。しかし、是非大事なことなので進めたいと思っていましたが、今日の説明の中に千歳で実際に掘削をされてやられたわけで、このあとも是非進めた方がよいのではと思います。そういうフィールドワーク自体をそういうことを一緒にやるのがツアーになってしまうのでは。掘ったついでに土壌を調べて平取町の場合はトマトに力を入れています、ワインとかも何故そこでおいしいものが採れるのかという情報を付け加えるとパワーアップしていくと思いますがいかがでしょうか。

草 苺： ありがとうございます。では南先生お願いします。

南： トレンチ掘削は苦勞して実施させて頂きました。民地を掘ることは、なかなか出来ないため、先ほどのトレンチ掘削は下水道工事を千歳市が行うということで半日だけ工事を止めて頂くように協力をお願いしまして、調査を致しました。ですから公共事業や建物を建築する時に基礎を掘りますが、そういう情報を役場でも取りながら、そういう機会にでも調査が出来ればもう少し面的に出来るのではないかと思います。

あと、この調査で学生が感激していました。1600とか1700年代の火山灰と思われる堆積層から出てきた木片が焼けていて、もしかするとそのところに火砕流が発生していたかもしれないと想像するだけでもわくわくしたそうです。そしてもっと勉強してみたいとも言っていました。そういうのとツーリズムを一緒に行くと面白いのかなと思、ご意見を頂く中で私も感じました。

草 苺： ありがとうございます。少し時間も過ぎて来ましたので、この辺でまとめていく事にしたいと思います。私がまとめるのではなく、観光学研究センターの敷田先生がいますので、歴史文化と観光と今日のタイトルに沿った流れの中で何かコメントを頂き、閉会していきたいと思いますが、いかがでしょうか。

敷 田： わかりました。必ずしも私の専門ではありませんが、今日は他の2組の発表を聞いていまして、その歴史と文化というタイトルの付け方は非常にいいと思いました。歴史という言葉から連想されるのは古典的な、といいますか歴史上で作られてきた歴史の荒波を受けても維持されてきたような文化でもありますし、もう一つ私たちは、現代文化というきわめて日常的な文化も否定せずに持っているわけで、その両方が少なくともツーリズムの対象にはなってくると思います。

先ほどそれを誰が、説明するかという話がありましたが、ガイドの方は現地の人であるべきかという議論です。どちらの立場にも立つというのが、私の主張でありま

す。例えば知床の世界遺産のガイドは、地元出身の方は1人か2人しかおらず、50人程いるガイドの殆どの方が外から来られた人です。その人たちが語る資格がないかというところではありません。その人たちが、知床の自然との関わりを濃く持っていれば語っていいのです。むしろ、そういう生活から離れてしまった地域の人より、語るものを持っているというのが現実です。但し、それは地域の方々が駄目だということではなく、もう一度そういう人達の様子をみて、触発されて以前の生活を取り戻すことも思い出すことも出来ますし、更に、新しく次の世代が体験を作っていくことも出来るはずなのです。そういう面では、古くからの文化や現代文化という区別もあまり意味がなく、いかに文化を創り維持していけるのかに、ポイントがあるのではないかと思います。

これに関連し3点申し上げますと1点目は、インバウンド観光やお客さんが来ることによるインパクトのコントロールだと思います。外から人が来ると必ず影響が出ます。例えばニセコの例が分かりやすいので申し上げますと、ニセコに海外から大勢のお客さんが来ていますが、最近よく聞くのは、折角、日本に来たのに日本が無いと言うクレームです。贅沢な話しですが海外がニセコにあるので、日本に来たのに日本に来た感じがしない。これでは非常に物足りないという、文化的なクレームを付ける方が増えてきたそうです。

もう一つは物理的なインパクトで、同じくニセコの例ですが、スキー場は無限に人が滑れると誰もが思っています。柵も無いし誰でも入れるからです。ところが、ここはパウダースノーを観光資源としていますが、供給量に限界があります。毎日あるものでもありません。そうしますと、私はパウダースノーを使えないと文句をいう人が出てきます。キャパシティがあり適度な量を受け入れるという、コントロールが必要だという、観光が持っているもう一つの特性でもあります。

2つ目ですが、外の人との接触があると、そこに新たな文化が生まれてしまいます。文化というと非常に大上段に被るのですが、おそらく文化の飽和的なもの、例えば新しい試みのようなものだと思います。それを完全に否定はできないということです。分かりやすい例としては、和菓子を日本文化だと思っていますが、和菓子は日本文化ではないです。和菓子の原料を考えてみただけであれば分かりが、砂糖は海外から来ています。実はオーストラリアのお菓子です。このように考えると原料は何であっても、文化の浸透力があれば日本のものと認識をして頂ける。極めて単純な事ですが文化がある方が、地域としても維持は可能だという原理が、そこから導き出せると思います。ここで新たに創り出した文化と昔からあった文化の、どちらが大切かという議論は出てきますが、これは時間を経てもみないとわかりません。南部鉄器の例が面白く、南部鉄器をピンク色にして売っています。黒ではないのです。ヨーロッパの人々や鉄観音茶を入れるために中国人の方が沢山買っています。このことを南部の人はけしからんとは言いません。なぜかという南部鉄器の技術があって、熱持ちがいい南部鉄器しか買っていないからです。偽物も勿論あります。この人達が買うことで南部鉄器の技術、つまり文化が維持されたという、極めて現実的な話がある訳です。文化は表面的なことだけではなく技術が保たれればよいと考えれば、南部鉄器の例は、私たちが文化を考えるには良い例だと思います。

最後ですが、発表の中でも話しましたが、お客さんが来るということは、経済的、経営的な面でもメリットが生じます。それはお客さんが地域を儲けさせてあげたいということで来る訳ではありません。彼らは彼らなりのメリットを感じて来るので、それをいかにお客さん個人のニーズを社会的なものに変換できるのかというのは地域側の力、翻訳の力であり、先ほど報告のあった琉球舞踊を見せるような場面でも必要です。単に珍しいというだけではなしに、これを維持する事に皆さんが役に立っている。皆さんの観光行動が、私たちの文化を維持することに、結果的につながっているという説明を、現場でするかしないかで大きな差が出てくると考えています。以上です。

草 苺： どうもありがとうございました。非常に分かりやすいまとめをお聞かせ頂きまして、ありがとうございます。最後の PR ですが、今先生かもお話しがありました、あるいはインバウンド観光ということに関しまして、開発協会の中に北海道インバウンドインフォというインバウンド情報の共有サイトを昨年 12 月に作りまして、一周年を迎えたところです。非常に評判によいサイトに仕上がってきておりまして、皆さんにも是非アクセスをして頂きたいと思います。「北海道インバウンド」あるいは「インバウンドインフォ」でも検索が出来ます。開発協会のインバウンドインフォは一年間で 5 万アクセスまでできておりますが、是非アクセスをしてみてください。

それからもう一つ PR ですが、先週はインバウンドインフォ開設 1 周年を記念したフォーラムがここでありました。北海道の歴史文化と観光に関する研究発表会をして頂きまして、また来週には、北大の公共政策大学院と JAC が主催で、開発協会が共催するシンポジウムがあります。「国際協力による海外市場の展開」です。もしご興味がある方は、外のテーブルにチラシを置いておりますので、お待ち返りを頂ければと思います。

今日は本当に長い時間有難うございました。5 人の先生方にあらためて拍手でお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございます。それからご参集の皆様方も本当に長時間お付き合いを頂きまして有難うございました。

では今日の研究発表会はここで終わらせて頂きます。

5. 閉 会

中 川： どうもありがとうございました。これで、第 11 回助成研究発表会を終わらせて頂きたいと思います。本日は、ご参加頂きありがとうございました。

パンフレット掲載の研究概要および説明資料

「北海道における先住民文化遺産観光の展開可能性に関する比較研究」

〔平成26年度助成〕

*北海道大学創成研究機構 特任助教 岡田 真弓
北海道大学大学院文学研究科 後期博士課程 高崎 優子

注) *共同研究の発表者

2007年、国連総会において「先住民族の権利に関する国連宣言」が日本も賛成して採択されると、先住民としての権利回復を求める機運が高まった。2008年、衆参両院は「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」を採択し、これまでのアイヌ施策をより促進し、総合的な施策の確立に着手し始めた。2020年には、アイヌ文化を多角的に伝承・共有できる博物館・伝統的家屋群・工房等の施設を備えた「民族共生の象徴となる空間」のオープンが決定し、アイヌ文化の振興と活用が産学官民を挙げて進められている。また、民間企業や行政機関、学術機関などの連携により、アイヌ語の挨拶「イランカラプテ（こんにちわの意味）」を北海道のおもてなしのキーワードとして普及させるキャンペーンも展開されている。このような追い風を受け、これまで「大自然」や「豊かな食」をその主要コンテンツとしていた北海道の観光シーンで、個性豊かなアイヌ文化の積極的活用が期待されるようになってきている。また、観光におけるアイヌ文化の活用は、アイヌの文化や歴史に対する広い理解に向けた重要な手段でもあることも指摘されている。

一方で、アイヌ文化の活用を生業として確立させるには課題もあり、そうした課題に対する行政の支援もいまだ十分とはいえない。さらに、沖縄を含む世界各地の先住民文化でみられるように、アイヌの文化遺産には独特な精神文化によって意味が付与された景観や口承伝承・舞踏といった無形文化遺産が多く含まれる。つまり、アイヌの文化遺産を観光に活かすということは、単なるモノやコトを見せるだけではなく、そこに込められた「意味」の伝達が強く求められるのである。

本研究は、西洋的な文化遺産概念、あるいは一般に想起される日本文化とも一線を画すアイヌ文化遺産を文化交流の手段として適切に観光に組み込み、生業に結びつく先住民文化遺産観光のあり方を検討することを目的としている。具体的には、アイヌと同様に日本の趨勢と異なる歴史と文化を持ち、かつ、観光を主幹産業として重視する沖縄県の事例を参照事例とし、さらに道内でアイヌ文化遺産の活用を積極的に試みている平取・知床・旭川の事例を検討することを通じて、（1）先住民文化遺産ツアーガイドのあり方、（2）先住民文化遺産の資源化、（3）先住民文化遺産の保護と活用の均衡のはかり方、を考察する。さらに上記の点を踏まえた上で、北海道における先住民文化遺産観光の展開に向けた提言を行う。

平成27年12月4日

第11回北海道開発協会助成研究発表会
『北海道の歴史・文化と観光』

北海道における先住民文化遺産観光 の展開可能性に関する比較研究

北海道大学創成研究機構 岡田 真弓
北海道大学大学院文学研究科 高崎 優子

1. はじめに(1):アイヌ文化と観光



1. はじめに(2) : これまでに指摘されてきた課題

- 「観光アイヌ」との葛藤
- 西洋的な文化遺産概念とは異なる「先住民文化遺産」であるアイヌ文化・歴史の適切な観光資源化
- 生業としての先住民文化遺産観光の確立

1. はじめに(3) : 本研究の目的

- アイヌに関する文化・歴史遺産を文化交流の手段として適切に観光に組み込み、生業に結びつく先住民文化遺産観光のあり方を検討する
- アイヌと同様に日本の趨勢と異なる歴史と文化を持ち、かつ、観光を主幹産業として重視する沖縄県の事例を比較事例とし、さらに道内でアイヌ文化遺産の活用を積極的に試みている平取・知床・旭川の事例を検討する

2. 研究の概要

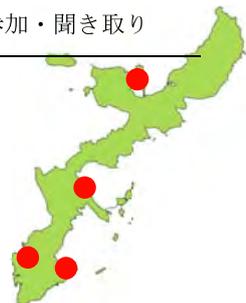
2-1. 研究対象と手法: 沖縄



2. 研究の概要(1): 研究対象と手法

□ 沖縄

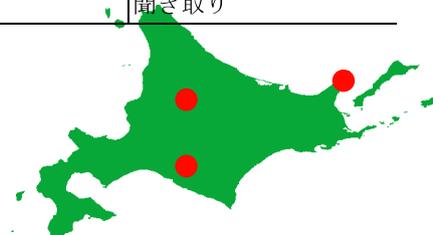
ご協力頂いた事業・組織	ご担当者名	調査内容
沖縄県教育庁文化財課 南城市教育委員会文化課	記念物班指導主事：金城篤氏 課長：大城秀子氏 史跡整備係：宜野座隆行氏	聞き取り 聞き取り
NPO 久高島振興会	ガイド (NPO 理事)：内間佑二氏	ツアー参加・聞き取り
南城市観光商工課・ 南城市観光協会	商工課課長：知念哲雄氏 商工課係長：島袋学氏 観光協会事務局長：宮城光也氏	聞き取り
那覇まちまーい	ガイド：石井周氏	ツアー参加・聞き取り
うるま市都市計画課	計画係：大石根淳氏 計画係：久高唯樹氏	聞き取り
今帰仁グスクを学ぶ会	事務局長：山内道美氏 ガイド：上間辰也氏	ツアー参加・聞き取り



2. 研究の概要(2): 研究対象と手法

□ 北海道

地域	ご協力頂いた組織	ご担当者名	調査内容
斜里町(知床)	NPO 法人知床斜里町観光協会	常務理事: 代田克雄氏	聞き取り
斜里町(知床)	アイヌ民族ツアーガイド	ガイド: 早坂雅賀氏	ツアー参加・聞き取り
斜里町(知床)	民宿曾長の家	梅沢征雄氏・悦子氏	聞き取り
羅臼町(知床)	株式会社知床らうすリンクル	代表: 後藤菜生子氏	聞き取り
旭川市	旭川市博物館	学芸員: 友田哲弘氏	聞き取り
旭川市	旭川市経済観光部観光課	富田悠介氏	聞き取り
平取町	株式会社ノーザンクロス	代表取締役: 柳秀雄氏	聞き取り
平取町	萱野茂二風谷アイヌ資料館	館長: 萱野志朗氏	聞き取り
平取町	平取町役場アイヌ施策推進課	課長: 貝澤一成氏 主幹: 吉原秀喜氏	聞き取り
平取町	アイヌ工芸家	貝澤徹氏	聞き取り



3. 議論(1): ツアーガイドのあり方について

□ 沖縄の世界遺産における文化遺産ガイドシステム

自治体	構成資産	ガイド養成講座主催	ガイド団体	ガイド料金	ガイド数
那覇市	首里城跡・玉陵・識名園・園比屋武御嶽石門	那覇市文化財課	案内親方*	応相談	80名
			識名里主	無料	92名
南城市	斎場御嶽	南城市観光協会	アマミキヨ浪漫の会	10名まで2000円	54名
うるま市	勝連城跡	うるま市教育委員会	うるま市史跡ガイドの会	2名まで1000円、 5名まで1500円	53名
今帰仁村	今帰仁城跡	今帰仁村教育委員会	今帰仁グスクを学ぶ会	無料(城跡外は有料)	25名
中城村	中城城跡	中城村教育委員会	グスクの会	無料	53名



今帰仁グスクを学ぶ会ガイド



アマミキヨ浪漫の会ガイド(斎場御嶽)



那覇市文化財課が主催する講座を受講した市民ガイド(首里城)

3. 議論(1): ツアーガイドのあり方について

- 地域の歴史・文化に特化した文化遺産ガイドの育成
 - 行政による学習機会の提供と市民の自発的学習
- 主生業として文化遺産ガイドが成立しづらい
 - 沖縄では、教育委員会や観光協会と協力体制を組む市民ボランティア
 - 先住民文化遺産(観光)の認知度



出所) 「今帰仁グスクを学ぶ会HP」
<http://nakijingusuku.com>



出所) 「こうほう南城 2014年10月No.106」



「知念文化財案内講師証」と書かれたガイドの名札

3. 議論(2): 文化遺産の資源化について

- 北海道
 - 行政・学術発掘による埋蔵文化財調査
 - アイヌ文化・歴史の収集・保存
 - イオル再生事業
 - アイヌ文化環境保全対策事業(平取)
- 沖縄
 - 1980年～『字誌』『市町村史』編纂
 - 今帰仁村歴史文化センター

☞ 「指定・未指定」「有形・無形」「過去の痕跡・現在」を総合的に拵い上げ、資源化

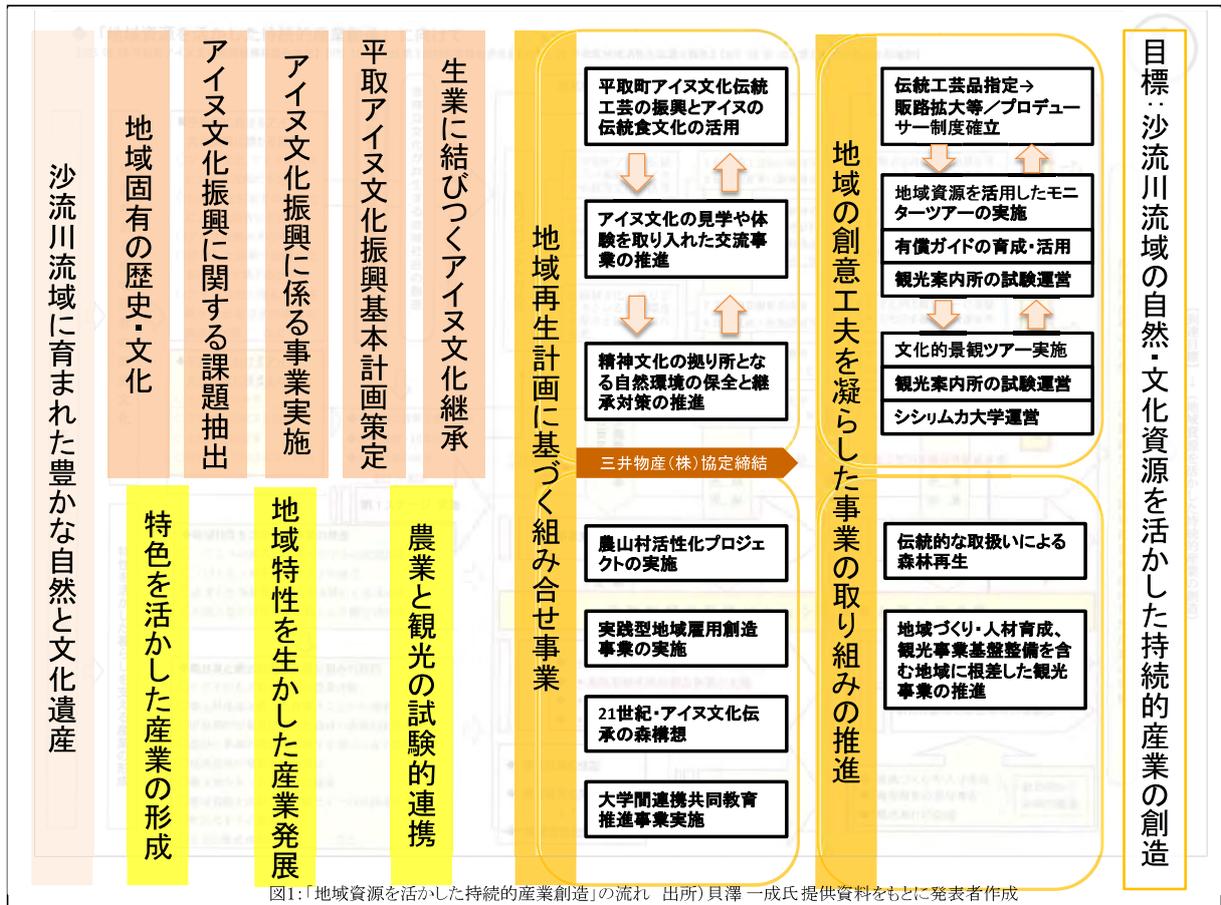


図1:「地域資源を活かした持続的産業創造」の流れ 出所) 貝澤一成氏提供資料をもとに発表者作成

3. 議論 (3)

3-3. 文化遺産の活用と保全の均衡について



久高島の御嶽に掲げられた注意喚起の看板



(右) 久高島の御嶽に関する注意事項が記された島内観光地図

3. 議論(3)

3-3. 文化遺産の活用と保全の均衡について

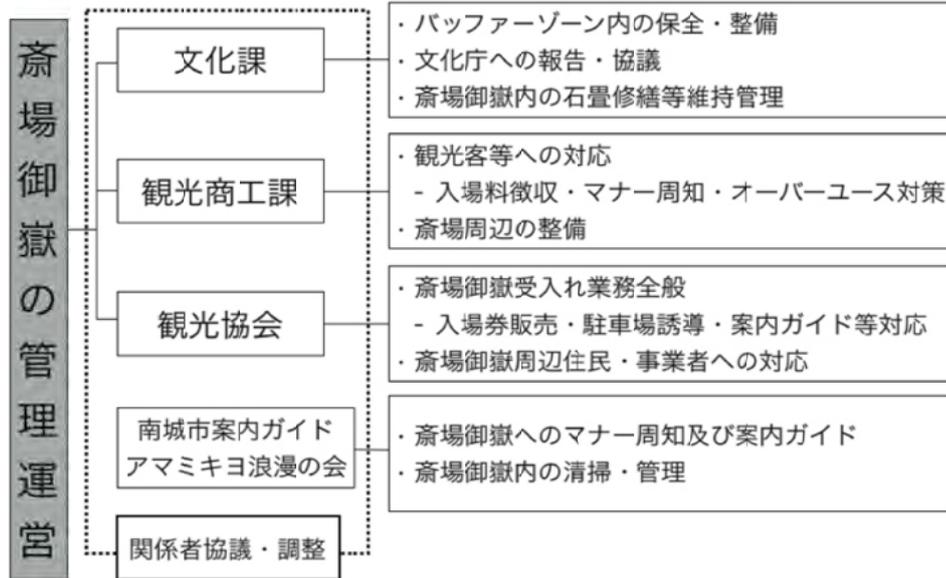


図2: 齋場御嶽の管理運営体制
出所) 南城市観光協会資料より作成

4. 提案

4-1. 歴史文化基本構想

□ 文化遺産を地域の資源にするような経済的インパクトを有する戦略的な計画立案

(1) 指定・未指定の文化財を総合的に把握する

(2) 社会全体で文化財を継承していくための方策

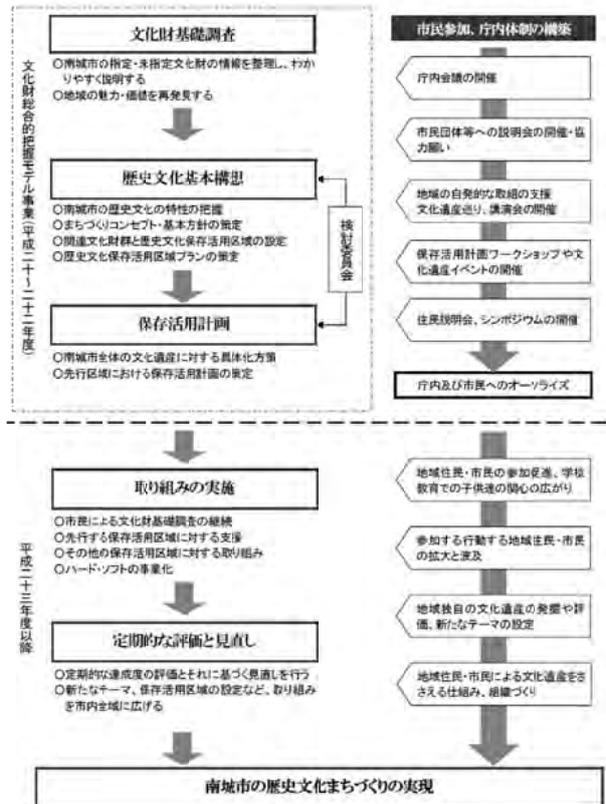


図3: 南城市の「文化財総合的把握モデル事業」の流れ
出所) 『南城市歴史文化基本構想保存活用計画』4頁より転載

4. 提案



自然の聖地

保護地域管理者のためのガイドライン

保護地域の文化的・精神的価値に関するIUCNタスクフォース
UNESCO人類と生物圏計画

編：Robert Wild, Christopher McLeod

本シリーズ編集：Peter Valerling



4-2. 自然の聖地／文化的景観という概念の普及

□ 2001年 世界遺産会議
「世界遺産先住民族専門家委員会」

□ 2012年 IUCN報告書
『自然の聖地等を含む自然保護地域の管理者のためのガイドライン』

5. まとめ

- 北海道(観光)における先住民文化遺産の位置づけ
- 社会の基盤整備として先住民文化遺産の資源化
- 先住民文化遺産を活かした観光の目的

謝辞

□ 本研究の調査にご協力いただきました北海道と沖縄の皆様に心より感謝申し上げます。

北海道で多くのことを教えていただきました梅沢征雄様・悦子様(民宿酋長の家)、貝澤一成様・吉原秀喜様(平取町役場アイヌ施策推進課)、貝澤徹様(アイヌ工芸家)、萱野志朗様(萱野茂二風谷アイヌ資料館)、後藤菜生子様(知床らうすリンクル)、代田克雄様(NPO法人知床斜里町観光協会)、富田悠介様(旭川市経済観光部観光課)、友田哲弘様(旭川市博物館)、早坂雅賀様(アイヌ民族ガイド)、柳秀雄様(株式会社ノーザンクロス)、また沖縄で学びの機会を与えてくださった石井周様(那覇まちなみ)、上間達也様・山内道美様(今帰仁グスクを学ぶ会)、内間佑二様(NPO久高島振興会)、大石根淳様・久高唯樹様(うるま市都市計画課)、大城秀子様・宜野座隆行様(南城市教育委員会文化課)、金城篤様(沖縄県教育庁文化財課)、島袋学様・知念哲雄様(南城市役所観光商工課)、宮城光也様(南城市観光協会)、本当にありがとうございました。

※肩書は、調査当時のものです。

主要参考文献

- 大城秀子(2011)「御嶽の祈り:地域が受け継ぐ形」『遺跡学研究』第8号, 128-133.
- 秋辺日出男(2010)「観光とアイヌ民族」第24回北方民族文化シンポジウム報告書『現代社会と先住民文化:観光、芸術から考える①』財団法人北方文化振興協会, 19-23.
- 旭川市史編集会議(2009)『新旭川史第四巻・通史四』.
- 大塚和義(1997)「アイヌにおける観光の役割:同化政策と観光政策の相克」石森秀三(編)『観光の二〇世紀(二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容3)』ドメス出版, 101-122.
- 岡田真弓(2013)「遺跡・遺産から学ぶ先住民の歴史と文化」奈良文化財研究所(編)『平成24年度 遺跡等マネジメント研究集会(第二回) 報告書:パブリックな存在としての遺跡・遺産』, 98-107.
- 小野有五(2006)「シントコ世界自然遺産へのアイヌ民族の参画と研究者の役割:先住民ガヴァナンスから見た世界遺産」『環境社会学研究』12, 41-56.
- 加藤博文(2009)「先住民考古学という視座:文化遺産・先住民・考古学の課題」『北海道考古学』45, 31-44.
- 門田岳久(2008)「信仰」の価値:聖地の遺産化と審美の基準をめぐる力学』『文化人類学』第73巻(2), 241-253.
- 金倉義慧(2006)『旭川・アイヌ民族の近現代史』高文社.
- 小林文人・島袋正敏(編)(2002)『おきなわの社会教育:自治・文化・地域おこし』エイデル研究所.
- 独立行政法人国際交流基金(2004)『沖縄のうたきとアジアの聖なる空間:文化遺産を活かしたまちづくりを考える』.
- 成田得平・花崎學平(1985)『近代化の中のアイヌ差別の構造』明石書店.
- 平取町(2010)「平取町アイヌ文化振興基本計画」.
- 北海道開発協会(2012)「アイヌ文化で広がる北海道の観光:多文化共生で魅力あふれる北海道へ」『開発こうほう』No. 592, 11月号, 8-19.
- 南城市教育委員会(2011)「南城市歴史文化基本構想・保存活用計画」南城市.
- 西村幸夫(2011)「文化財保護の新たな展開:歴史文化基本構想のめざすもの」『月刊文化財』No. 577, 4-8.
- 宮下克也(2008)「記憶の覚醒と地域づくり:沖縄の都市近郊の事例から(第1部 空間の表象,<特集>文化人類学の現代的課題II)」『哲学』No.119, 233-256.
- 大和智(2011)「歴史文化基本構想:地域の新マスタープランをめざして」『月刊文化財』No.577, 9-13.
- 山村高淑・高崎優子・張慶在(編)(2011)『沖縄におけるガイドツアーの運営実態に関する事例調査報告書:北海道大学アイヌ・先住民研究センター先住民エコツーリズム・プロジェクト』北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
- 吉原秀喜(2011)「アイヌ民族の祈りと文化景観・環境」『遺跡学研究』第8号, 72-79.
- Disko, S. & H. Tugendhat (2014) *World Heritage Sites and Indigenous Peoples' Rights*, IWGIA-Document 129, http://www.iwgia.org/iwgia_files_publications_files/0698_orld_Heritage_Sites_FINAL-eb.pdf
- IUCN(2008/2011)『自然の聖地:保護地域管理者のためのガイドライン』<https://portals.iucn.org/library/efiles/documents/PAG-016-Ja.pdf>.

「アイヌ伝承と地名から見た北海道における災害危険箇所」

〔平成26年度助成〕

*一般社団法人全国治水砂防協会 常務理事 南 哲行

防災・減災を検討する上で、過去の災害履歴は最も基本的かつ重要な情報であり、多くの場合、都道府県や市町村の災害史、国の気象災害報告等の資料が用いられる。さらに大規模な災害を対象とした場合には、一般に発生頻度が低いことから明治以前の災害記録も重要な資料とし取り扱われる。しかし、北海道においては本州と異なる独自の歴史・文化の変遷を遂げたことから、明治以前の記録が乏しいのが実情である。

一方、北海道に先住するアイヌの人々は、独自の言語、宗教、文化を有する先住民族であり、文字は持たないがユーカラに代表される豊富な神話・伝説を有し、また地名としてもその土地の自然的特徴や生活との関わりに由来する呼称が今も多く残されている。

以上から、本研究では、金田一京助氏を始めとするアイヌ語・アイヌ文化の専門的研究者がとりまとめた北海道内のアイヌ語地名及び伝承に関する既存文献・資料から、災害履歴と関係があると考えられる地名や伝承を抽出し、現在の防災・減災施策への適応性に関して考察した。

まず、地名では、「ピ、サツ（砂礫の流出）」「サン、シロノ（大水、洪水）」等、その地域の災害履歴に関係する情報が含まれていると考えられるアイヌ語の地名を抽出し、それらが現在も地名として用いられている具体の例を、地形図等を参考に引き出した。このことは、例えばハザードマップと合わせて、これらのアイヌ語地名を災害との関係性を防災の観点から説明し周知を図るなどすれば、住民が地域の身近な場所での災害履歴を認識するための手段として、活用の可能性があることを示唆している。

次に、アイヌの方々が伝承してきた神話・伝説に関する文献から、山津波（土石流）、河道閉塞、山崩れ・地すべり、洪水、津波、火山噴火と考えられる20例を抽出し、災害との関連について考察を行った。この事例の内、近年対策上の課題となっている「河道閉塞とその決壊による災害」と解釈される千歳川と西別川の伝承について現地調査を実施した。特に千歳川においては、千歳市街地（道の駅「サーモンパーク」内）においてトレンチ掘削を行い、伝承が表現していると想定される災害現象の一部について説明できる可能性があることを示した。このことは、荒唐無稽に感じる伝承であっても過去の大規模は災害履歴を探る手がかりとして、行政が防災・危機管理上、有益な情報が得られることを示唆していると考えられる。

本研究は、北海道大学アイヌ先住民センター、千歳市、弟子屈町立図書館、北海道庁、北海道開発局など多くの方々からのご助言と協力を得て進めることができ感謝し記します。

平成27年12月4日
第11回助成研究発表会
(一財)北海道開発協会6階ホール

アイヌ伝承と地名から見た 北海道における災害危険箇所

南 哲行

一般社団法人全国治水砂防協会 理事
NPO法人防災情報研究所 理事



1. はじめに

東日本大震災以降

○「想定外」は理由にならない



○対象となる現象を広く・時間を長く

○防災→減災

北海道の時代区分

- 北海道には稲作を中心とする弥生文化が伝わらず、縄文文化に鉄器を導入した続縄文文化や擦文文化を経て、12世紀頃にアイヌ文化が成立
- 15世紀頃から函館等での和人の駐留・商船の来航が記録されており、江戸時代にかけて和人の文化が徐々に入ってくる

北海道の文化	オホーツク文化		アイヌ文化										
	続縄文文化	擦文文化	和人の文化										
日本史の一般的な時代区分	古墳		奈良	平安		鎌倉	室町	安土桃山	江戸				
西暦	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀

(アイヌ民族:歴史と歩み)

2. 構成

- (1) アイヌ語地名にみる災害
- (2) アイヌ伝承にみる大規模な土砂災害
(「(1)」に比べ発生頻度が小)
- (3) 事例による検証



3. 災害に関連するアイヌ語 の地名について



アイヌ語の地名

山田秀三「北海道の地名」より

- 大部分は、地形をいったものである
- 同形、累形の地名が全道に数多く散在している
- そこには、その地名がつけられた当時の「意味」があったと考えられる

砂礫の流出の1 サツ（乾いた）

- 砂利が多く、乾水期になると伏流する川
増水時には災害を起こしやすい
 - サツ・ポロ・ペツ 札幌（豊平川）
 - サツナイ川 十勝地方など
 - オサツナイ川 渚滑川源流など
 - サツフミイ 札富美 湧別町
 - オ・サツ・ペ 尾札部 川尻・乾く・者
（川） 釧路地方、南茅部町など

砂礫の流出の2 ピ

石を意味する

- ポロ・ピ・ナイ 大・石・沢 幌美内
- ピン・ナイ 傷・沢 えぐれた様な沢 支笏湖畔
- ビタタ・ヌンケ ピタル・ランケ 小石川原・
を下す えりも町
- ピ・ピ・ルイ 石・石・はなはだしい ベ
ベルイ川富良野の川
- ピ・サン・ペツ 石が・流れ出る・川 毘砂別
浜益村

トウイ、ペルケ（崩れた）

□ 急崖の崩壊に関係

- トイ・ピラ（崩れた・崖）：豊平（とよひら）札幌市
- トウイ・パケ（崩れた出岬）：問牧（といまき）枝幸町
- ペルケ・ヌプリ（裂けた・山）：美留和山（弟子屈町）

ウェン（悪い）

・ 災害・厄に関係

- ウェン・ナイ（悪い・川）雨煙内（雨竜町）
- ウェン・ペウ（悪い川）宇遠別川 陸別市
- ウェン・シリ（悪い・崖）十勝川岸ほか
- ウェン・ピラ（悪い・崖）上平 苫前町

トツク（土地が隆起する）

- 河川の流路が変化する毎に土地が隆起したという意味を持つ
- 地すべりが多く存在する河川流域を表す可能性がある
 - 徳富川〔新十津川町〕
 - 突符川〔乙部町〕

トウ・コタン（廃村）

- 災害や疫病などによって捨てた村
 - トウ・コタン：床丹 サロマ湖西端の地名
など 床潭 厚岸町 など
 - トコタン 有珠山近郊 噴火の後廃村となり
- ただし、ト・コタン（沼・村）、トウ・コタン（二つの・村）との判別が困難になっている地名も

カムイ（神の）

- 地形が険しいなど、人の容易に近づけないところ、通行が危険なところ
- 火山など、災害を起こす巨大な自然の力が働くところ
 - カムイ・コタン（神の住むところ）石狩川、歴舟川など
 - カムイ・エトウ（神の、岬）神威岬 浜頓別町
 - カムイ・ヌプリ（神の・山） 摩周湖東南壁の山
 - カムイ・ロキ（神の・座） 足寄市の山

5. アイヌの伝承にみる 北海道の土砂災害

アイヌの伝承と自然災害

- 自然災害は、人間以上の力を持つ様々な神、魔神の振る舞いで引き起こされる。（必ずしも故意、悪意ではない）
- 前兆現象（川が突然干上がる、動物の異常行動等）に注意を払い、神や年長者からの警告に従い避難することで命が助かる
- 利己的な行動への戒め

アイヌの伝承と自然災害

金田一京助「アイヌ文化志」より

- 一見荒唐無稽であっても、その伝承が生まれ、残されるに至った何らかの理由が必ずあったはずである。
- 決してそのまま個人的事実を信じようとするのではないが、それを通じて過去と我々をつなぐ鎖の失われたものを拾い上げようとするのである。
- 絶たれた鎖の今一端を探し求めることによってのみ、過去が現在とつながっていく。

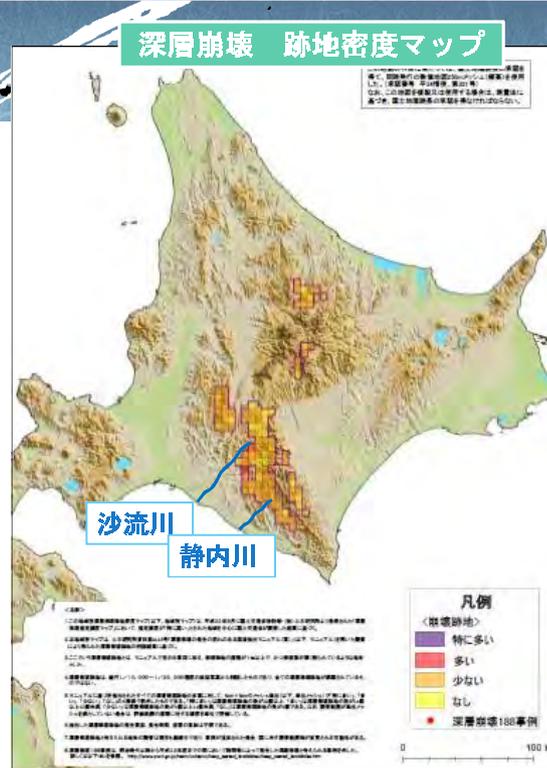
文献調査について

orta ne kunak	その日のことだと
a-ye a toho ta	いわれた当日は
ruyampe ka isam-no,	雨も降らず風も荒れないの
	に,
wen okimumpe	激しい山津波で
290 wen toira	物凄い土埃が
chi-sana-sanke,	押し下って来た,
Shipichar-putu ta	染退川の川口では
tu menoko	二人の女と
shine hekachi	一人の少年とが
u(w)e-chip-ne hine 23)	舟に乗って
pet-tom tuipa,	川を渡ろうとしていたが,
a-chip-ko-kirpa 24)	舟が覆って
ki shir-ne yakun	しまったという、だから

o-kim-un-pe
山からくるもの
=山津波

日高地方の 山津波伝説

- 分水嶺から十勝川と沙流川の両方に大山津波が下った、津波と同時に来襲した等の伝説もある
- 静内川にも山津波の伝説が残る
- 日高山地は国土交通省の深層崩壊頻度推定で「特に高い」とされ崩壊跡地も多い



沙流川の山津波 → アイヌラックルの自叙～

- 沙流川の上流の大沼に棲む大アメマスが飢餓を起こして人間を苦しめていたため、アイヌラックル（文化神）が、大格闘の末に大アメマスを退治したが、**大沼を決壊**させてしまい、激しい**山津波**が起こって川下に流れ下った。
- そのため養姉から「せっかく人間の村を飢饉から救っておきながら、どうして**村を壊す**ようなことをするのか」と窘められた。

津波と山津波の同時来襲

- 兎がある人間の酋長の村に行って「恐ろしい**津波**と激しい**山津波**が一緒に来襲しようとしている、高い所に逃げろ」と告げたが、その酋長は村人に命令し兎を追い払わせた。
- 兎は次にオキクルミ（英雄神）の村に行って同様に告げると、オキクルミは兎に恭しく礼拝し感謝の言葉を述べた。しばらく後、村々を津波と山津波が同時に襲い、**避難していたオキクルミとその村人のみが助かった**。

神居古潭

- 昔、神居古潭に棲む凶悪な鬼神が石狩川に**大岩を投げ落として河道を堰きとめた**ため、上流のアイヌが溺死しそうになった。
- これを見ていた大雪山の神が一部の岩石を破壊し、危うくアイヌ達は助かった。怒った鬼神は大雪山の神に掴みかかったが、そこに現れたシャマイクル（英雄神）が鬼神と大格闘の末、首を切り落とした。
- 鬼神の首や胴体等が岩に変化し今も神居古潭に残っている。

西別川

- 根室地方の西別川がある朝突然干上がっており、村人達は地震の前触れか**山津波**かと騒いだ。
- 川上に行ってみると、狭窄部に大木の様な怪魚が横たわり**川を堰きとめ**、上流には沼が広がっていた。
- 下流の村落から村落へと急使が飛び、川辺のアイヌが山の上に逃げる頃、**水は恐ろしい唸りをあげて峰を砕き樹木を押し倒して流れ下った。**

鵲川の地すべり

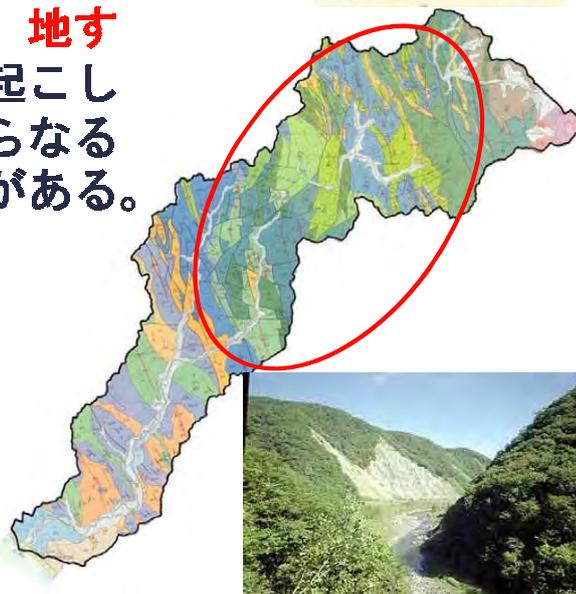
- 昔、アイヌ部落の代表者を一人ずつ勇払に集め殺す謀略があった。
- それを知らずに鵲川の上流部の人たちが丸木舟に乗って下ってきたが、急にルベシベのところの山の岬が川にせり出してきて船を通さなかった。
- このため命が助かったと言われ、この岬に今も感謝の祈りと酒を捧げている。

鵲川

- 流域の中流部には、地すべりや斜面崩壊を起こしやすい蛇紋岩等からなる神居古潭変成岩類がある。



変成岩類	
Sp	蛇紋岩質岩石
Hr	ホルンフェルス
Cs	結晶片岩質岩石
Gs	片麻岩質岩石



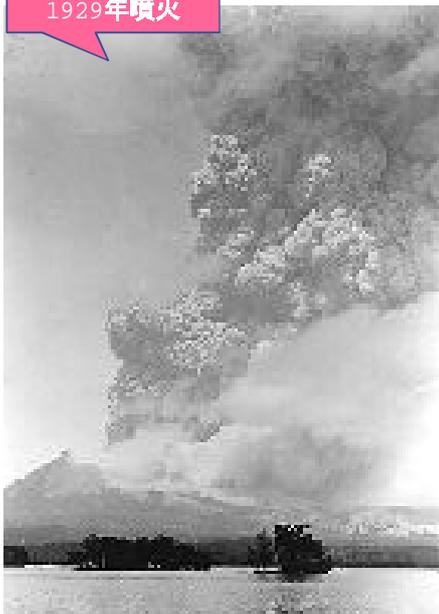
北海道駒ヶ岳の噴火

- 室蘭の岬の部落に住んでいた兄弟が噴火湾の対岸に移ろうと船を漕いでいた。
- 突然駒ヶ岳が爆発し、噴出した軽石が海上に浮かんで船を動かすことができなくなった。



北海道駒ヶ岳

1929年噴火



- 1640年の噴火では山体崩壊(体積 2km^3)の後、大規模なプリニー式噴火(総噴出量 2.9km^3 、マグマ噴出量 1.1DREkm^3 ・VEI5)を起こし、火砕流が発生
- 1694、1856にもVEI4の噴火、他にも多数噴火
- 1929年噴火は総噴出量 0.34km^3 、マグマ噴出量 0.14km^3 、VEI4、火砕流発生、死者2名、負傷者4名、牛馬の死136頭

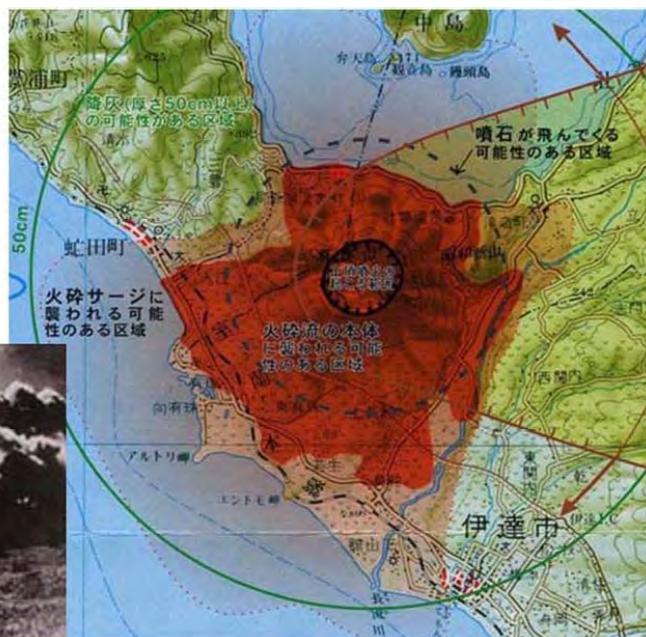
気象庁HPより

有珠山の噴火に関する伝承

- 昔、トコタンという村が今の虻田の築港あたりにあったが、有珠山の泥流で全滅した。
- 有珠山の噴火で有珠の村は全滅したが、虻田から長万部方面へ逃げた人々だけが助かった。
- 村に残って祭壇に向かって祈り続けた村長は、火に焼かれて灰になったまま座って動かなかった。
- 噴火が治まって長万部方面から戻ってきた人々が村長に声をかけ手を伸ばすと、灰になった村長が崩れた

有珠山の噴火

有珠山火山 防災マップ

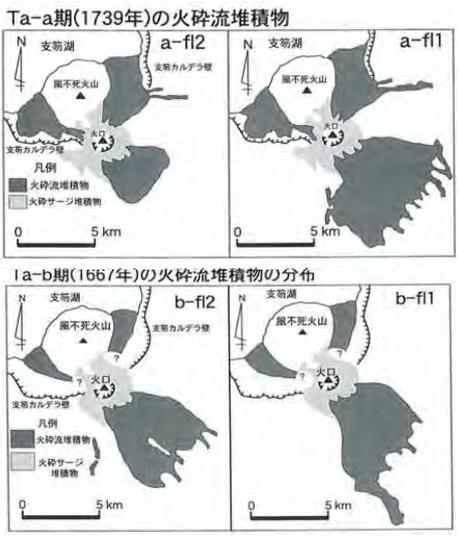


千歳川

- 昔、大津波によって今の千歳神社の近くの山がもぎ取られ、馬追山にぶつかってから石狩川に沿って北の方に流れていき海へでていった。
- 昔、支笏湖の水があふれて洪水になり、千歳にあった山が押し流された。



樽前山の火山活動



- 1667年大噴火(総噴出量 2.8 km^3 、 Mg 噴出量 1.1 DRE km^3 ・VEI5)。苫小牧北方で降下火砕物が約2m堆積。
- 1739年大噴火(総噴出量 4 km^3 、 Mg 噴出量 1.6 km^3 ・VEI5)、火砕流発生。

気象庁HPより

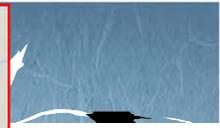
- 支笏湖に火砕流が流下するなどに寄り、千歳川にも何らかの影響を与えた可能性

1667年および1739年噴火による火砕流堆積物の分布(古川,1998) 日本活火山総覧より



恵庭岳を東南東より見た写真(勝井ら,2007)



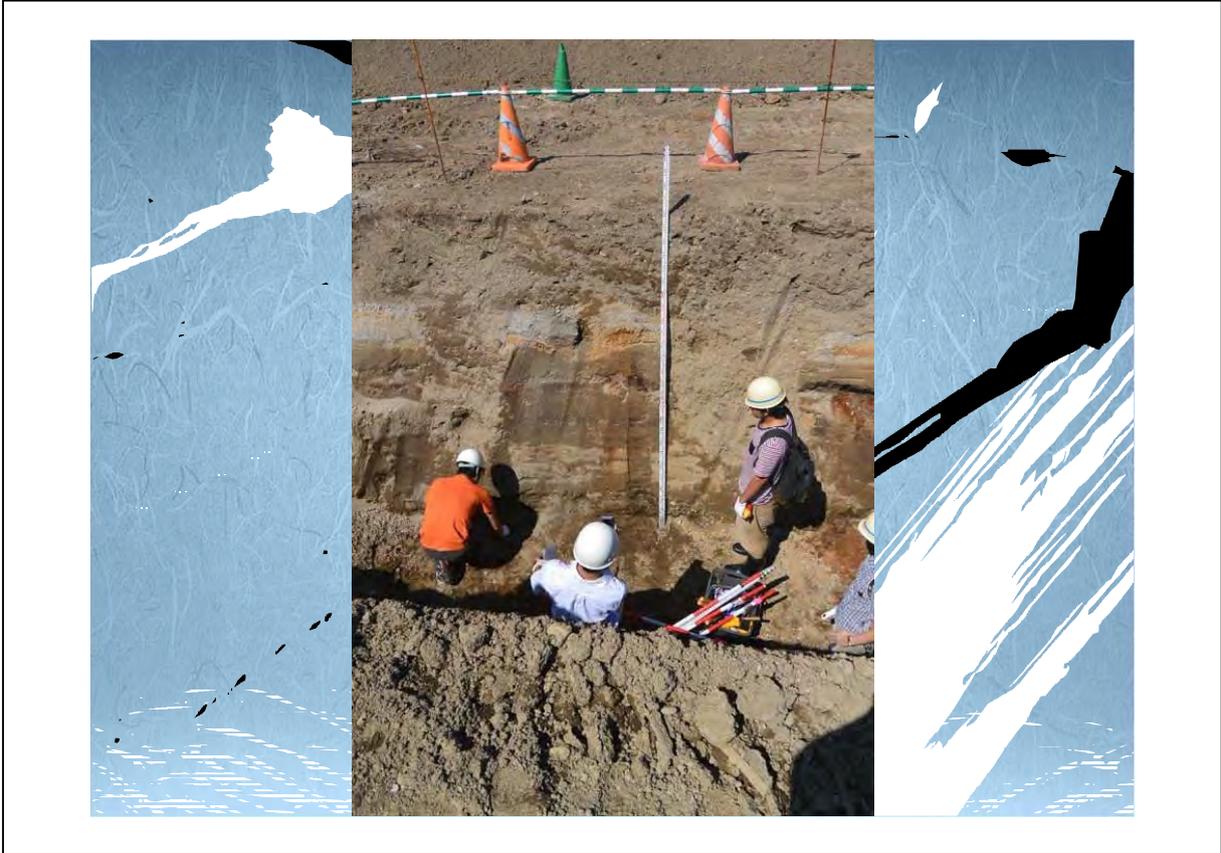


千歳川扇状地のトレンチ調査 千歳サケのふるさと館（千歳市花園）



トレンチ調査（NHK札幌放送局による取材）

調査協力：千歳市役所





まとめ

- アイヌ伝承により、明治以前の北海道においても大規模な災害が発生していたことが推測される
- 今後はこれらの伝承等を手掛かりとして、地形・地質等の自然科学的な調査を行うことは、北海道の土砂災害履歴の解明に有効と考えられる。

ご清聴ありがとうございました
イヤイライケレ

「観光による農村と都市との創造的関係の構築に関する研究」 ～ワインツーリズムの事例分析を通して～

〔平成25年度助成〕

*北海道大学観光学高等研究センター 教授 敷田 麻実
北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士後期課程 八反田元子

本研究では、人口減少と少子高齢化が進む国内の農村において、生産活動を対象とする観光を通じた農村と都市の交流によって、食料生産(農村)と消費者(都市)の役割が変化し、両者の創造的関係が構築できることを、ワインツーリズムの事例から考察した。そして関係者の参加と地域資源の活用を基本としたEUの「統合型農村観光(Integrated Rural Tourism : IRT)」を参考に、持続可能な新しい農村政策を提案した。

1950年代からの高度経済成長は、都市圏における工業化のみならず農業の工業化を促し、GATT交渉の枠組みが変化するなかで、農村は巨大な市場経済システムに組み込まれた。そうしたなかで、「人口流出」による農業の担い手不足は、圃場整備事業による大規模化や機械化で補われてきたが、補助金政策による支援だけでは問題を解決できず地域は衰退した。

そのため、都市との交流人口拡大による農村振興政策として、「総合保養地整備法(リゾート法) (1987)を活用した交流施設の建設が進められたが、バブル経済の崩壊で多くが破綻した。その後「新しい食糧・農業・農村政策」(1992)で「グリーンツーリズム」が政策として示され、「食料・農業・農村基本法」(1999)の整備を経て、「観光立国行動計画」(2003)でも都市と農村の交流による地域振興策が目指された。2000年代以降も、農村を訪問先とする、ルーラルツーリズム、グリーンツーリズム、エコツーリズム、さらに「二地域居住政策」が進められてきた。しかしどの政策も、都市からの観光客に農村が地域資源を提供する基本構図に変化はなく、「共創的な関係」構築への政策的検討や研究は不十分であった。

本研究で言及した「ワインツーリズム」は、農村活性化のための選択肢であり、ワイナリー訪問とワイン試飲による従来型観光とは異なるツーリズムである。ワインツーリズムの研究は、1990年代後半から研究が進められてきたが、国内での研究はほとんどない。

本研究では、消費者が積極的な学びや体験を通して生産の実態を知り、その一方で生産者が消費地の文化と接する相互交流によって、創造的な「関係の場」を形成する「クリエイティブツーリズム」としてワインツーリズムを評価した。生産者がブドウ栽培地の自然(土質や気象条件等)に働きかけ、原料の潜在力を最大化する工夫が、ワイン生産では顕著に認められた。そこに効率重視の大規模農業とは異なる、「文化的側面」があると言える。

また、本研究で実施した現地調査と都市消費者アンケート調査の結果では、農村の生産者と都市の消費者による「共創関係」構築の可能性が示唆された。さらに、両者が触発し合う「文化的な交流」による創造的関係性の構築を、「都市と農村の共感モデル」として提案した。

観光による農村と都市との 創造的関係の構築に関する研究 ～Integrated Rural Tourismによる ワインツーリズムの分析から～



北海道大学観光学高等研究センター 敷田麻実

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士後期課程 八反田元子

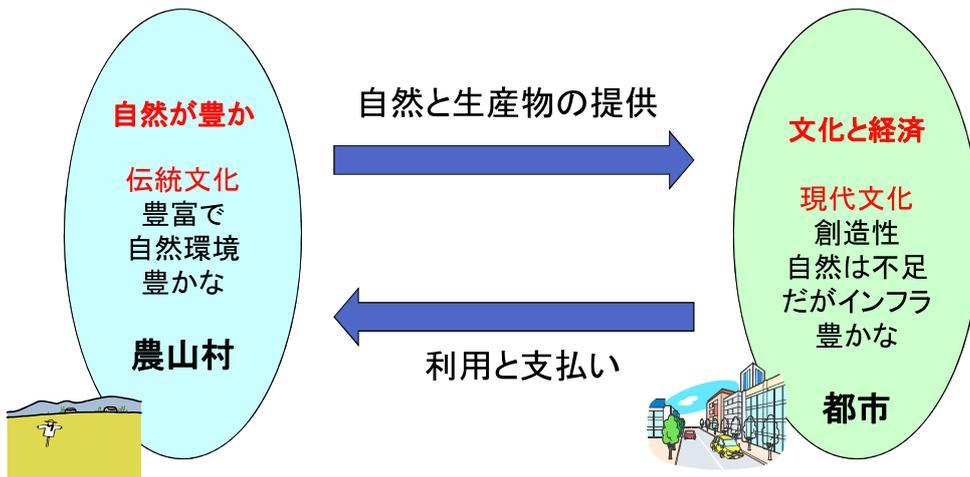
研究の目的

- 人口減少・少子高齢化が進む農村における、
- 生産活動を観光対象とする交流による人的交流をもとに、
- 農村(生産)と都市(消費)の社会構造が変化し、両者の創造的関係を構築が促されることを、

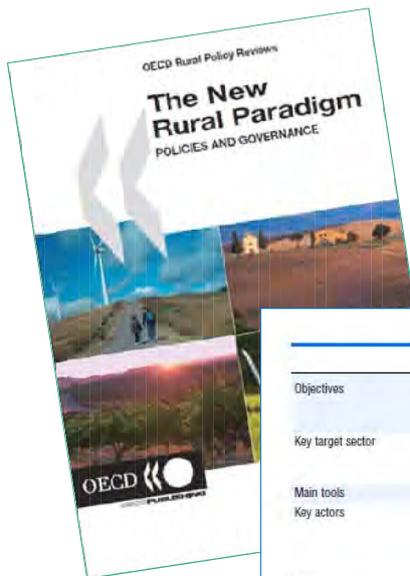
事例をもとに考察する

役割分担する農村と都市

自然環境が豊富で伝統文化がある農山村
×
創造性に富み現代文化がある都市



新たな田舎： 創造する農村



- OECDカ国の土地の75%が田舎
- そのうちの96%が農地
- しかし、農業就業者は全体の13%
- そして、田舎の総生産の6%しか担っていない



Table 0.1. The new rural paradigm

	Old approach	New approach
Objectives	Equalisation, farm income, farm competitiveness	Competitiveness of rural areas, valorisation of local assets, exploitation of unused resources
Key target sector	Agriculture	Various sectors of rural economies (ex. rural tourism, manufacturing, ICT industry, etc.)
Main tools	Subsidies	Investments
Key actors	National governments, farmers	All levels of government (supra-national, national, regional and local), various local stakeholders (public, private, NGOs)

OECD(2006)『The New Rural Paradigm: Policies and Governance』, 164p.

なぜツーリズム(観光)に注目？

- 地域資源を効果的に活用できる
 - もともと地元にあるものが生かせる
 - 資源開発コストが少ない
- 地域の多様な関係者が参加できる
 - 旅行商品・観光サービスは複合製品
 - 宿泊・食事・販売・情報・行政・運輸・教育
- 製品輸送コストがかからない
 - 消費者の方が来訪する
- エンタテインメントは最高の創造産業
 - ツーリズムには工夫する余地や創意の機会



クリエイティブツーリズムへ

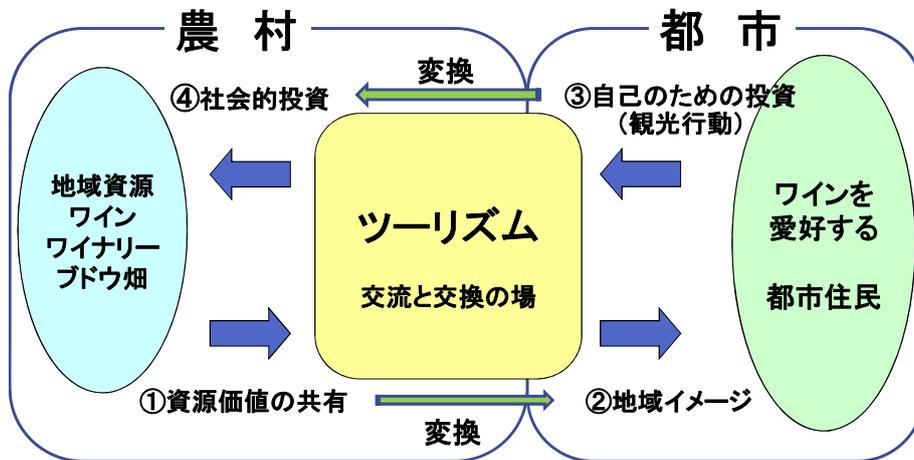
創造性と文化	資源化されるもの	キーワード
遺産観光 ヘリテージツーリズム	文化遺産や自然遺産を見て楽しむ、見学だけ	鑑賞、評価、学校教育 (過去の人々の創造性の産物を楽しむ)
体験観光	学芸員や専門家によるガイドツアーを体験	体験、学習 (専門家の創造性の産物を楽しむ)
クリエイティブ ツーリズム	ライフスタイルをまねる、自分でつくって楽しむ活動	参加、遊び、仲間 プロシューマー ^{注1} (自らの創造性で楽しむ)

(以下を参考に著者作成)

Prentice, R. and Andersen, V. (2007) 「Creative Tourism Supply: Creating culturally empathetic destinations」, 『Tourism, Creativity and Development (Contemporary Geographies of Leisure, Tourism and Mobility)』, Greg Richards and Julie Wilson 編, Routledge, New York, , pp. 89-106.

トブラー＝アルビン(1980)「」, 『第三の波』, 徳山二郎編, 鈴木健次・桜井元雄訳, 日本放送出版協会, 東京都, 642p.

ワインツーリズム：農村に来ることの意味の説明



上記の「中間システム」を含むモデルは、敷田麻実(2014)「生物文化多様性を活かしたツーリズム」、『創造農村：過疎をクリエイティブに生きる戦略』、佐々木雅幸ほか編、学芸出版、京都市、pp. 70-87.から転載した。なおオリジナルモデルは、敷田麻実・木野聡子・森重昌之(2009)「観光地域ガバナンスにおける関係性モデルと中間システムの分析—北海道浜中町・霧多布温泉トラストの事例から—」、『地域政策研究』、(7)、pp. 65-72pから作成した。

なお作成にあたっては、橋本努(2007)『自由に生きるとはどういうことか—戦後日本社会論』、筑摩書房、東京都、269p.を参考にした。

クリエイティブツーリズムの定義

“Tourism which offers visitors the opportunity to develop their creative potential through active participation in courses and learning experiences, which are characteristic of the holiday destination where they are taken.”

出典：Raymond & Richards(2000)



“Creative Tourism is tourism directed toward an engaged and authentic experience, with participative learning in the arts, heritage or special character of a place” (The City of Santa Fe,2010)

ワインツーリズムを事例とする理由

■ ワインの特性

栽培地の土質や気候を反映した高付加価値製品であり、栽培地で製品化が理想

■ ツーリズムとしての特性

製品、景観、イベント、体験など多様な誘因があり、特定品目を対象とし、生産と消費の関係が把握し易い

■ 社会的動向

地域振興策に位置付ける自治体が増え、地域経済への波及効果を期待し、ワインツーリズムが各地で実施されている

ワインツーリズムに関する先行研究

- **定義**: ワイン産地を訪れ、ワインとそれに関連の施設やイベントを楽しむ仕組みや考え方。出典:Hall(1996)

- **分類**: Special Interest Tourismの領域
大分類(Rural Tourism) 小分類(Wine/Gastronomy)

出典:Smith et al.(2010)

【海外の研究領域】

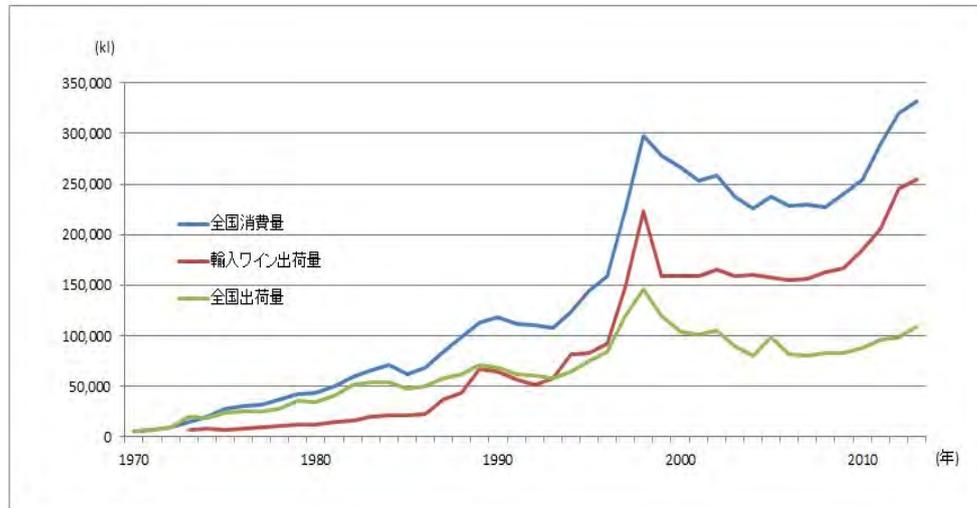
- フードとワインに関する研究
- ワインビジネスでのツーリズムの潜在力の研究
- ツーリズム対象としてのワイン関連イベント研究

【国内の研究領域】

- 経営学分野でのワイン産業関連の研究
- 各地のワインツーリズム事例の報告



国内におけるワイン消費の推移



(国税庁資料をもとに作成)

■ 事例対象地域の概要

	池田町	都農町	三笠市	岩見沢市	(旧栗沢町)
人口 (H22)	7,527人	11,137人	10,221人	90,145人	6,191人
人口減少率 (H22/S35)	55.0%	23.3%	81.8%	4.9%	75.7%
高齢化率(H22)	34.5%	22.6%	42.3%	27.8%	36.8%
経営形態	町直営	第三セクター	民営	民営	民営
ワイナリー数	1	1	3	1	3
ワイナリー開設年	1963	1993	1998	2002	2002

北海道池田町の事例

- 町財政の再建
 - 地域資源の山ブドウに着目し、ワイン生産を事業化
- 無借金・黒字経営
 - 経営を維持し、利益の一部を町独自事業の財源充当
- 地域ブランド形成
 - 農業振興効果というより、「ワインのまち池田」を発信
- 消費需要の開拓
 - 地域内では町民参加の海外視察
 - 国内各地に「池田ワイン会」を組織

宮崎県都農町の事例

- ワイナリー開設の経緯
 - 流通のグローバル化に対応
 - 生鮮果樹市場から酒類市場に参入
- ワイナリーの概要
 - 20万本生産体制、レストラン併設（郷土料理とのコラボ）
- 消費者との関係構築
 - 95%が県内消費、「値頃感」で需要開拓、県外来訪者の支持
- 内外ステークスホルダーとの連携
 - 「みんなのワイン」を掲げ地域内連携、「世界のワインとなる日」を目指し地域外協力者と連携

空知南部(岩見沢市・三笠市)の事例

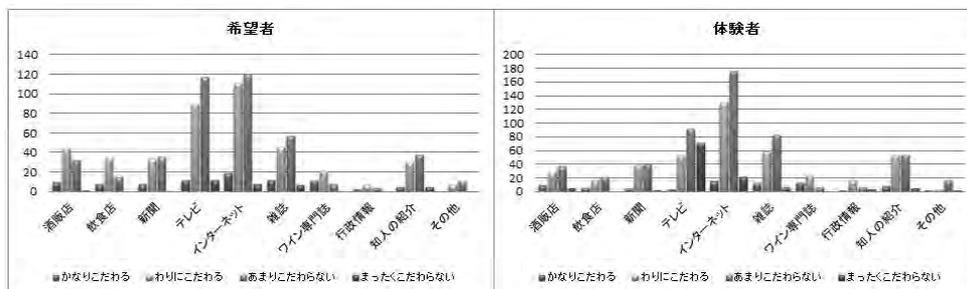
- 小規模ワイナリー等の集積
 - 地元農業者の挑戦、新規就農者による開設
- 生産者の主体性
 - 消費者への情報提供と関係構築、直販率の高さ、体験機会提供
- 多様な関係者との連携
 - 生産者相互、地域内外の関連分野・異分野
- 行政による発信
 - 地域ファンづくり、地域イメージ形成
(農家戸数・耕作面積では約0.1%)



生産者と消費者との「関係の場」の形成を示唆

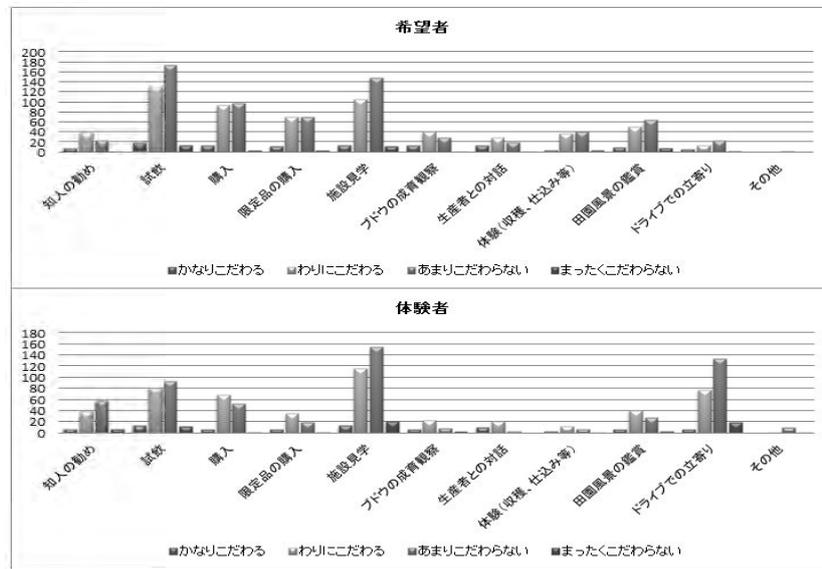
アンケート調査の概要と結果(1)

	調査A	調査B(予備)	調査B
期間	2013年10月～11月	2014年1月17日～20日	2014年1月28日～30日
項目	飲用歴、訪問動機、情報源、購入の有無、訪問の印象等		
方法	持ち帰り郵送	委託先の登録モニターに対するインターネット調査	
サンプル数	49	10,568	1,024



ワイナリー情報の入手方法(希望者・体験者) 単位:人

アンケート調査結果(2)



ワイナリー訪問のきっかけと目的(希望者・体験者)単位:人

総合考察

- 生産活動の意味や来歴を、生産者に限らず地域住民が理解し、誇りをもって来訪者に伝える。
- 生産者と消費者との交流により、製品の潜在力を引出し「新たな文化」を醸成する。
- 有形だけではなく無形の地域の資源や観光対象が、創造的関係の構築では有意である。
- 多様なステークスホルダーの参加により、「地域への誇り」が形成される。

平成28年3月

■編集発行

(一財)北海道開発協会 開発調査総合研究所

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目

セントラル札幌北ビル

TEL 011-709-5213 FAX 011-709-5225